

つて漸く近年收支相償ふに至り既に今日に於ては優に利得の算出を見るを得られる。製鐵所現在の生産力は年額銑鐵約十四萬噸銅塊二十萬噸各種製品約二十三萬噸で其原料鐵鑛の使用額は約三十萬噸であるから其五割五分は朝鮮産四割内外は支那其他内國産である。尙其の生産額は逐年増加して陸海軍需要の外鐵道院其他の一般官廳用品及民間需要品の製造の多きに上つて、今日に於ては之等の取引額は實に總額の八割内外を占むるに至つた。而して今後益々發展すべき氣運に向つてゐる。

日本製鋼所は明治四十年北海道炭鑛汽船會社、英國アームストロング、キットヲース會社同ヅキツカースリミテッドの三會社共同經營の下に創立せられたもので、四十四年から事業

を開始した。原料銑鐵は支那漢陽産及瑞典産を用ひ生産品は主に兵器船舶等の材料たる鍛冶鋼塊及鐵鋼の鑄造品であつて、其他普通の需要品を製造する原料品の製造状況は以上の如くであるから未だ到底需要額を充すに足らずして多額の供給を海外に仰ぐの状況である。而してその品目中銑鐵其他鐵塊の過半は英國であつて支那は之に次ぎ條竿及板類は英國及獨逸最も多く軌條は米國及獨逸から多額を輸入してゐる。今明治四十四年より大正二年に至る三ヶ年の平均輸入額を統計に依つて表示して見ると左の通になる。

鐵類輸入統計

事 項	數 量	價 格
鐵 塊	三九七四噸	九六三二五九圓

現今國産の趨勢

業 工 械 機

最後に鐵の問題

我が國に於ての工業界は日に月に進歩して一般精巧優良なる機械の製造は優に内地の需要を充す許りでなく、進んで外國に輸出し得るの現況に達したのは誠に喜ぶべき現象である。然も其原料鐵材の如きは、從來凡て諸外國の供給に仰ぎたるに近年に至つては稍々其の製造の見るべきものがあり未だ需要の大部分を製産し能はずとするも遠からず製鐵所の擴張或は民間製造業の發達によつて、輸入の杜

筒 鐵 軌 板 條

管 線 條 類 竿

一八、七六六
一五、四四五
七〇、六八〇
三二、四九七
三七、九〇五

一三、二八〇、八三〇
三四、九六七、一五六
四五、〇九七、五九
三三、六七、一七五
五、一九九、二七四

業 工 械 機

絶を事實の上に現はす事は敢て難事にあらざるを豫測せしむるに至つたのである。

茲に於て最後に残されたる原料鐵の問題は甚だ重要な地位を占むるに至る即ち如何に軍器の獨立を計らんとするも、又如何に造船、運輸、機械の各方面に於ける獨立の事業を期せんと欲するも、我國に産出する小額の鐵塊は、到底此の重大なる使命を完うする事は能きない。故に必然の結果として原料鐵塊の需要は之を海外の供給に俟たなければならぬ。而して支那に於いての鐵の産出は殆んど無盡藏であると云ふから我國民の最も注意を要すべき所ではあるまいか。何れの方面からするも支那に於いての鐵鑛に對して特殊の利權を得得るのは最も緊要とする所である。

刷子工業

内地生産の状況 内地に於ける刷子の主要産地は大阪であつて東京愛知之に次ぐと雖も其産額は甚だ少ないのである。大阪に於ける刷子の製造は明治二十年頃から其産額を増加し來たるものであるが、三十三四年頃の商況不振にて一時悲境に陥たつが其後漸次盛況を極めて今日に至つたのである。現今製造所の主要なるものは帝國刷子株式會社、ゼー、ロイヤル、ブラッシ合資會社等にて其他小規模に製造せる工場は其數頗る多い。而して我國に於て製造する刷子の種類には調髪用、齒磨用、爪用、軍用、衣服用、帽子用等にして輸出品としては調髪用には其臺木に紫檀、黒檀、椿等を用ひ豚毛

は獨國又は佛國産を用ひてゐる。齒磨用には柄に牛骨を用ひ毛には獨佛支那産の豚毛が多い。其他臺木は用途の如何によつて異つてゐるが或は楓、櫻、椿等を用ひ大抵木材に色塗をするのである。尙各種刷子の柄又は臺木には彫刻をなして需要地の嗜好に適せんことに努めてゐる。今内地に於ける製産額を統計に依つて示して見ると左の通りである。

刷子製産統計

年次	齒磨用		調髪用		其他	
	數量	價格	數量	價格	數量	價格
明治三十八年	三,四九一	九五四	六八	一七五	二六八	二三八
同三十九年	四,三二八	一,二五三	一〇五	一七六	二六	八三六
同四十年	三,九六八	一,五六〇	七九	一五九	二二	九六六
同四十一年	五,三三二	二,二九〇	一一	三六	七	八六一

現今國産の趨勢

原料需給
の状況

業 工 子 刷

同 四十二年	四,九三	一,四三	二五二	五九六	一〇五	八五四
同 四十三年	四,六七	一,四〇	三二二	五九六	二二七	九一九
同 四十四年	五,五八	一,五〇	一〇六	四二一	二五〇	七二四
大 正 元 年	三,八四五	一,三〇	二〇	四五	三三四	六二七

一四八

原料需給の状況 刷子の原料として主要なものは、牛骨、木材及豚毛である。牛骨はまだ内地の供給不十分なるが爲め北米、英國、濠洲等から輸入する。木材の重なるものは紫檀、黒檀、櫻、楓、椿等であつて、紫檀・黒檀の支那又は蘭領印度から輸入するものあるの外は凡て内地品である。豚毛は主として支那、香港及獨逸から輸入し獨逸品は品質上等ではあるが價格の不廉である爲め一般に使用するのは支那産を主としてゐる。尙豚毛の代用として白色馬毛を使用するものもある

刷子輸出
の状況

業 工 子 刷

が品質劣等であるから、普通品の生産に補ふ事は出来ない。斯くの如く原料の一部は海外輸入に仰ぐの状態であると雖も。將來我畜産業の發達によつて其大部分は補給せらるゝに至るであらうし。殊に農家副業としての養豚業發達するに至る時は、豚毛の供給は潤澤なるに至るであらう。何れにせよ工業原料供給の立場から見ても我畜産業の進歩は最も緊要であると云はねばならぬ。

刷子輸出の状態 刷子の輸出は逐年増加する状態であつて大正二年に於ける輸出は調髪用二十七萬打九拾參萬圓、齒磨用百六十一萬打八拾貳萬圓、爪用三十九萬打參拾貳萬圓、合計二百二十七萬打貳百七萬圓であつた。主要輸出國は北米合衆國にして年額百拾八萬圓即ち全輸出額の五割七分を占め之

現今國産の趨勢

一四九

に次いで、英國の貳拾壹萬圓、加奈陀の貳拾壹萬圓、濠洲の拾貳萬圓支那の九萬圓、獨逸の五萬圓等である。而して刷子の米國市場に於ける競争國は、佛國を第一とし、獨逸英國之に次ぐ故に今次大戰亂の勃發によつて佛獨兩國の供給は自然杜絶するに至るを以て此の機會に於ける米國市場の販路擴張は最も有望である。且つ支那に於ける生活状態の變化は人民の散髮改服を促進したるが爲め、調髮用及び衣服用刷子の需要を増加し尙齒磨用刷子の使用増加と相俟つて將來に於いての我好顧客たるの狀態にある。斯の如くして我刷子輸出の前途頗る多望となりと謂ふべく、まして南洋方面に於ける人文の發達は、人民の生活状態を向上せしめんとする趨嚮であるから、漸次各種の刷子の需要を喚起すべきは明らかである、

我製産業者は今から能く其慣習嗜好を研究して其製産に努力する事が最も必要とする所である。

印 刷 界

印刷界の狀態 戦争が始まると間もなく印刷業組合では二割方の値上げを決議した。實際鉛、錫、各種の紙、クロース、印刷用インキ、機械等の諸道具及び材料が騰貴したのだから無理もないが、果して俄に二割と云ふ値上げをして差支ないだらうか、尤も材料は大低輸入品が多いのだから、此の狀態が長く續けば上げるなど云つても自然に上つて来るであらうが、該決議は聊か早過ぎた様に思はれる。現に小さい處では必要に迫られて値上げした向も大部分ある様だが、大きい印

刷所では心持上げた位なもので、二割杯と値上げした處はな
い様である。

鉛は米國から 此際印刷業者の最も困りさうなものは鉛の
缺乏である。鉛は多く濠州から輸入されて居たのだが、戦時
禁制品の性質上全く輸入が杜絶されて了つた。其結果として
活字は定價以前の儘だが、割引率が二割方上つて來たのであ
る。

鉛は飛驒、富山、日向等にも少しは産出するが、逆も話に
ならぬ程の小額である。それに鉛の用途はペンキ製造、白粉
製造其他の工業にも澤山使用するから、大鑛山がない以上何
うしても之を外國に仰がねばならない。濠洲から輸入しなけ
れば米國邊から輸入するであらう。現に此間秀英舎外二三會

社聯合して百噸許りを米國に注文した。活字は何んなもので
も出来るが、原料がないのは甚だ遺憾である。

印刷紙は有望 印刷用紙の製造はまだ、幼稚であるが、
東京板紙、三菱製紙、富士、王子等の製紙會社が發達して來
て新聞雜誌用紙は勿論大抵の書籍を作製する紙は何うにか斯
うにか出来る様になつて居るのである。只困るのは技術が進
歩しないのと値段が稍高い爲め赤門紙其他優良な紙に國産紙
は壓倒されて居るのは誠に残念である。經濟上の原則として
安いもの宜いものは誰が何と云つても盛んに需要される事、
水の低きに就くと一般だから仕方がないが、文部省杯でも教
科書の如きは損のない程度で國産紙を使用する様に心掛けれ
ば夫れでも大部効果があると思ふ。同時に日本の製紙業者も

一五四
 努めて賣價の低廉を圖つたならば此の機會に於ても日本の製紙業の發達は期して待つべきであらう。

アートペーパー アートペーパーの如きは當分日本で出来る見込はない。此紙は非常に光澤があつて滑らかだがあれば紙の表面に粥の様なものを塗抹するので、紙の内部は素質不良な紙なのである。此の上等品は米國で出来るが、日本で使用してゐる安ものは大抵獨逸で作るのである。獨逸の商人は富の程度を見抜いて恰度買ひさうなものを賣り付けるから、勢ひ買入れる様になるのである。

アートペーパーは蓄へがなく最初は一二ヶ月で無くなるだらうと思つてゐたが、上海に之を積み歸つた船があつて入港したので漸く當分は間に合ふ事になつたのである。又クロ

スも殆んどアートペーパーと同様普通獨逸から來るので今は殆んど市中に無くなつたから小さい處では随分困つてゐる。日本で作つても糊を布の裏に塗ると表へ出て表面が滑かにならなくなるので誠に悪物になつて了ふ。恐らく少し研究したら出来ると思ふが今の處では一寸出来さうもない。

オフセット印刷 アートペーパーが少くなる結果としてオフセット印刷の流行を見るに至るであらう。オフセット印刷といふのは、紙の表面が滑でなく何んな粗面の紙でも自由に印刷する事の出来る印刷である。普通の網目版、石版等表面が滑らかでなければ鮮明な印刷を望む事は出来ないけれど、オフセット印刷なら決してそんな心配はない。印刷の方法は版面をアルミ又は亞鉛にて作り之をゴムに移しゴム版にて印

刷するので輪轉機でも印刷する事が出来る位だから、印刷には容易である。印刷には一種の風韻があつて油繪の様な趣のある印刷である。

今後の覺悟 其他印刷機械は八頁十六頁などいふ小さいのは日本で出来るが、大きいのが精巧なのは大抵輸入品である。印刷インキは黒なら日本で出来るが、赤青紫等色物に至ると未だ容易に出来さうもない。斯んな風で印刷用品の多くは外来品に仰ぐ始末だから、日本の書籍等の高いのは止むを得ないが、僅に原料品で望みのあるのは紙のみである。印刷技術に就いては美術學校圖按科で印刷製版術を教へる事となつたから稍望みがある。今後の覺悟は原料の製産を發達させ同時に當業者が技術の發達を計つたら印刷術は進み且安價に印刷

する事が出来るであらう。

化粧品

畏くも皇后陛下には其尊き御身を御化粧遊ばすには、止むを得ざる物の外は努めて日本品を御使用あらせらるゝとの御事である。現に宮内省に納める化粧品は其種類殆んど百餘種に及んでゐるが、悉く日本で出来る物である。宮内省と云つても上は大奥勤めの高貴の女官から下は針女、下女に至るまで色々あるが、上の爲す所下之に習ふの習慣で國母陛下が國産御奨励の思召は彼等をして西洋物を避けしめる様になつたのである。帝國の婦人たるもの誰か之に倣はぬものがあらう。

動かない舶來品 併し如何に舶來品を避ける様にしないで

化粧品

品質で値
上げ

はならぬと云ふもの、實際品質優良で値段の比較的安いものは之を驅逐するにも及ぶまい。例へばクチャックラ藥用的石鹼の如きは一個五拾錢もする石鹼だが皮膚病者は之を使用すれば偉効があり従つてニキビ杯には効用がある。内地産の藥用石鹼杯の如きは遠く及ばないのである。又佛國のビノー會社香水、米國コルゲート會社化粧品、ペーアの石鹼若くは藥用化粧品オイントメント等に至つては到底日本品の匹敵し得ない長所がある。嘗て外國人が手を一杯に火傷をした時オイントメントを塗つたら忽ち治つたと云ふ事である。

品質で値上げ 以上の如く化粧品の原料は大抵輸入品なのである。處が一向値上したと云ふ話を聞かない。何うも變だ

化粧品

製造は可
成盛大

と思つて能く調べて見ると、夫れは金錢で値上げをする
と競争をして居る關係上賣れなくなるのを恐れて、品質を一
割なり一割五分なり下げる事としたのだ。例へば獨逸の香料
を止めて米國の廉いのにするとか、又は一匁位減するとか或
は品質は従前の通りだけれど分量を少くするといふ様な方法
を取つて胡麻化して居るのである。此の方法は決して眞面目
な商人の遣り口ではない。正直に値上げをして品質を替へぬ
方が眞面目で好い。

製造は可成盛大 我國の化粧品製造業は大分發達して香料
其他の原料さへ南洋地方及び歐米から仰げば大抵は獨立して
製造する事が出来る様になつた。併し凡てが下手で品質は外
國品に比するとまだ及ばないものが多い。香水でもクリ

一六〇

ムでも白粉でも大抵の化粧品は外國の原料を多く用ひてゐるのである。けれども國産化粧品の賣行も非常なもので、白粉でも或物は一年に參拾萬圓から賣出してゐる、化粧品のあつるものは近來盛大になつて矢張參拾萬圓位の產出してゐる。石鹼も却々盛んなものがある。

化粧品類 日露戰役後國民一般が非常に贅澤になつた爲め、化粧品の輸入の如きは夥しい巨額に達した。是に於て政府は四十四年稅關率の改正を行ひ輸入防止の手段を講じ間接に内地製造額の上に保護を與へた。其結果輸入額は三分の一に減少した。一體化粧品の如き直接皮膚に使用する時は、肉食の歐米人と、米食の邦人とは皮膚の素質からして非常に相違がある故、米食の邦人には仕うしても邦人の皮膚に適ふやう拵

へたものでなければならぬ。此の理は經驗の上から漸く理解され舶來崇拜熱が冷めて。進歩した内地製品の使用が盛んになり目下白粉も石鹼も化粧水も殆んど和製に限られ、舶來品は纔かに百分の五位な需要に止つてゐる。石鹼の主要原料たる苛性曹達も製造業者が苦心の結果之に優る代用品の發明が完成せんとしつゝある。斯かる状態故今度の戰爭で本場の佛國や英國製品の輸入は杜絶した。けれども些しも需要に差支へなく却つて舶來品の驅除和製品萬全の歡ぶ可き現象を呈してゐる。

製粉事業

長足の進歩發達 從來我國小麥粉製造は殆んど全く水車の

利用であつたが、日露戦争後、機械製粉事業勃興し、今や製粉會社の數三十餘、總資本金壹千萬圓、製造能力一日一萬八千樽(一日四萬三十二噸)に上り、市場取引きは、全く機械製粉を以て標準とし、水車粉洋粉の如きは、殆んど其の影を絶つに至つた。

	麥粉輸入高	内地製産高	合計
明治四十年	三三,三六〇 ^{千斤}	二五四,六九五 ^{千斤}	三七七,九一五 ^{千斤}
同 四十一年	五八,三三三	二七七,六九七	三三九,五二九
同 四十二年	三三,三〇八	三六六,一九四	三八八,五〇二
同 四十三年	二九,八九〇	三九三,二五六	四三三,一四六
同 四十四年	二九,四四四	四四〇,六五六	四七〇,一〇〇
大正元年	二八,〇四七	四六四,六六〇	四九二,七〇七

明治四十年に一億二千萬斤の輸入は、大正元年には、僅々二千八百万斤即ち約一億萬斤を減じ、内地産額は二億五千万斤より四億六千万斤に増加せしを以て、製粉業發達の著しきを知る事ができる。

斯く殆ど驅逐せるも尙百七拾萬圓の輸入ありて、全く輸入を絶たざる所以のものは、

- 一、因襲の久しき外國品に慣れて使用を變ぜざる事、
- 一、原料並に風土の關係上内地器に比して多少の特長ある事、

一、相場變動の上に於て商人の思惑輸入を爲すものある事、等の事情に基因したが最近製粉會社に於て、技術の研究益々深く、原料に於ても從來輸入されなかつた優良品を買入る

製粉事業

年次	内地原料	化粧原料	合計
明治四十年	一〇七、二〇九石	四〇、〇七三石	一四八、三〇二石
同 四十一年	一五五、二四三	二二、二七一	一六六、五八
同 四十二年	一八八、二六四	二五、〇九〇	二一四、三五四
同 四十三年	一九五、八四五	三五、六六八	二三一、四六三
同 四十四年	二、三三、三六五	三八、〇五五	二六、六六〇

一六四
等、専ら外國でに比して遜色なきものる製造し低廉なる價格を以て供給すべく腐心して居るから、輸入粉を全く防遏する時機がある事を信じて居る、
原料の輸入激増 然れ共其の原料は内地産のみで足るべくもなく、製粉の輸入減と反比例して、小麦の輸入は増加しつつある、其の統計の示す處に據れば

製粉事業

大正元年

二四二、八四二

三七、六六六

二七九、五〇七

即ち精製品の輸入を原料の輸入に、更めたるに止まり、其輸入にあるは即ち一つである、加之内地製粉が市價の好況に際しては多數製造者は、何れも手一杯の製造を爲すを以て原料輸入を急増し同時に、内地市場に於ける小麦粉の供給は忽ち過剰となり、其結果製粉當業者の困難を來す事が往々ある。現に大正二年に於ける小麦輸入高の、一躍千貳百萬圓、百二十五萬圓に倍加せるは、大正元年に小麦市價の參圓拾八錢なる空前の高價を見るに至つた爲めで、此結果は、大正二年より三年戦役前に於ける、二年餘の長時間、常に市價低落、市況不勢を持續し、遂には、貳圓參拾錢と云ふ空前の安價に

現今國産の趨勢

陥り販賣者の疲弊製造業者の操業半減乃至、全廢等斯界は、一種の恐慌状態に陥り延いては、本年の如き、内地小麥一斗二三合替の安價を見るに至つたのである。

輸出好望 斯く一面に於て外國粉輸入品を驅逐したと共に其製造能力は國內の需要を充して餘りあるに至り、海外輸出の途も開くべき必要を感ずるに至つたが、政府も本年六月當業者の請願した輸出麥粉戻税の件も、愈々勅令第百二號を以て實施せらるゝに至り、此方面に一步を進めんとする機運に向つて來た。

營業者の疲弊 惟ふに斯る結果は麥粉の海外輸出が殆んど行はれざる時に於て、製粉業先づ長足に發達して然も、其供給の激増を消化し得、市場未だ開拓せられざりしに由來する

のである。

然れども、今後支那南洋等に於ける無限の需要地に、供給せんか、壹千萬圓の資本をすら、尙有せざる我製粉事業は却て其の供給を充す事が不可能である。

まして製品過剩難の如きは、有り得べからざる所である政府も茲に見る所があつて、輸出粉に對しては、輸入税返戻の制度を設け以て奨励する處があつたが、原料を米國に仰げる我製粉が米國小麥品と競争して勝者たらんには難く、依然米品に壓せられて、輸出は行はれない。

内地は小麥粉の洪水に襲はれ、若し今回の戦亂に依つて米國麥の騰貴輸入困難等の事がなかつたなら、我國製粉事業は殆んど、全滅の悲況に陥つた事であつたらう。

製粉事業

朝鮮農業の開發 即ち我製粉業の將來は、市場問題以前に、原料問題を解決するの必要がある、此點に就ては、内地小麥作の改良、品種の選擇、未墾地開墾地等の方法、大に努むべきである。雖も、前途の大問題より見れば寧ろ二階より目薬を注すやうなものである。

即ち朝鮮小麥の使用と其發達を圖るを以つて、最良策と信じる、今日我製粉業者が朝鮮小麥を、使用せざる所以は、品質痛く米品に劣れるに拘らず、兩者同一の輸入税あるが爲に外ならない、若し是等の障害を撤去し得て、主として鮮麥を原料とするに至れば、我が小麥粉の海外輸出を行ふことは易々たる事である。

朝鮮小麥の狀態 朝鮮總督府の統計に依れば、同地小麥作

製粉事業

の狀況は左の如くである。

年	作付反別	收穫高	一反歩收穫
明治四十二年	一一一,〇五丁	七四八,三四石	〇,六七三石
同 四十三年	一三〇,二四反	六七八,六九九	〇,五二一
同 四十四年	一五,七八八	九七〇,三七八	〇,六三一
大正元年	一六九,二六二	一,〇九四,七四四	〇,六二七

右の如く累年其産額を増進しつつある、故に若し其の施設法宜しきを得れば米國小麥の輸入の大半を節減し得るのは、決して難事ではないのである。

當業者の希望 尙當業者としては、内地原料のみならず、外國原料の輸入の容易なる事を望み、従つて當業者としては、小麥の輸入税の、全廢を以つて、最も望む所であつて、

一七〇
 之れが解決に付き、何等の手段をも講じられないのは、遺憾である。

既に輸入に於て、無税とすれば、戻税の煩を省き得られるのである。

然れども此如きは、米價との對照上望み難いとすれば先づ朝鮮小麥の移入税の全廢の必要がある、(今後八年の後は撤廢せられるものである)蓋し朝鮮に於ける、小麥生産額は、近年著しく増加したが、品質の優良なる米國濠洲小麥と同一の税金を課せられる爲め、又其品質調成不完全なるため、内地輸入を阻害することが大である、此點に於て當局者の、猛者を希望してやまない。

蠶糸事業業

蠶糸 蠶糸は家蠶の繭を手繰・座繰機械等の方法で其糸を解舒したるもので、之れを分ちて生糸及び屑糸とする。生糸にも佛國向きの細糸と。米國向きの太糸とがある。又屑糸にも熨斗糸と生糸とがある。

蠶糸は本邦海外輸出品の其の主位を占むるもので、年々の消長はあるが一ヶ年凡そ四百萬貫の巨額に上り、其重なる輸出先きは米國で、全額の六割を占め佛國之れに次ぎ二割餘で其の他伊・英等の順である。全國の産額中最も多いのは長野の一百萬貫。愛知の三十八萬貫。群馬の三十貫。之れに次ぎ山

梨・岐阜・埼玉等は二十萬貫以上。福島・山形は十一萬貫以上である。

蠶糸の種類

(甲) 生糸 之れは普通の桑蠶繭、數個の糸條を集めたもので、之れに器械糸、座繰糸、折返、提鐵砲、島田等にわかれて居る。

器械糸と云ふのは水力・電氣・蒸氣等の諸力で器械を運轉して之れによりて製出せられたもので、品質尤も佳良價格も亦貴く、座繰は農家の副業として座繰機によりて製出せられたるものである。故に品質は善良でない。折返も亦座繰の一種で唯結束法の異なるのみである。其他提鐵砲・島田等皆結束法の異なるによりて命名したるものである。何れも品位劣等で外國輸

出としては價值なきものである。一般に長野は器械糸。群馬は座繰糸。福島は折返を以て名高い。

(乙) 屑糸 之れは生糸を抽出する際に出せる屑より製出せるもので。又分ちて熨斗糸・玉糸・生皮苧・練絲等とする。熨斗糸は生糸を製するにあたり、初めに繭の外部を除く時に生じたる屑を引き延したるもので。生皮苧は之れを除きたるまゝ引き伸したるものである。又玉糸は玉繭から製したるもので。練糸は絹糸紡績の原料として使用せらるゝものである。

(丙) 紡績糸 これは生糸屑・屑繭・生皮苧・其他を原料となし紡績製糸の方法によりて紡出せる絹糸を云ふので俗に絹紡と云ふ。

生糸の貿易 本邦生糸販路の盛に開けたのは明治十年以後で。當時米國では恰も絹物製造の勃興に際し本邦生糸の價額

一七四
 が低廉で。又品質粗悪ならざりし爲め大に其聲價を博し。需要益々増加して以て今日に至つたのである。然るに世界工業の進歩は實に驚くべき境遇に達し。機業界も亦昔の比でない。之れが原料の精選は大に世人の注目する所となつて。比較的進歩しない本邦生糸の較もすれば市場に驅逐せらるゝ様になつた。其事實は益々之れに近づきて。近年伊太利產生糸の米國市場に現はるゝもの頗る多く。支那製生糸亦漸く競争の位置に立たんとして居る。本邦生糸の取引商たるものは勿論。苟も製糸家たるものは其由つて來る缺點を闡明にして之れが改良發達を企てなくてはならぬ。左に最近數年間の生糸輸出概況を表示すれば、

輸出先	明治四十年	同四十二年	同四十四年
英國	五,六五〇	一五二,三九三	三四五,七七四
佛國	二五,一三四,〇〇七	二四,二〇六,四四四	二〇,六六八,〇〇四
伊國	一一,三七八,八七	九,六五二,二九七	一四,五三〇,二五五
露國	三四五,〇九八	一,七五九,七八〇	二,四五四,五七八
米國	七九,七五九,八九三	八六,五三七,八三三	八九,八八八,七五七
加奈陀	三〇,七五六	三二八,六〇〇	三七八,六八三
其他	一一五,三九六	一,六一六,九〇三	六〇九,〇四三
合計	二六,八八八,六二七	二四,二四三,二二九	二八,八七五,〇九四

即ち此表によれば本邦生糸の大顧客は米國で。而も其需要は年々増加の傾向を示して居る。第二の顧客は佛國なれどもこれは次第に減少の傾向を示して居る。英米及び加奈陀に於ける我生糸の需要は著しく増加しつゝあるものゝ如く。概して

蠶糸事業

海外に於ける本邦生糸の需要は年々に増加し。最近大正元年に於て一五〇、三二一、一九八圓の多額に上つて居る。

本邦生糸製造略沿革 我國生糸の起源は甚だ古くて。歴史上にも明瞭に代々の天皇が御奨励になつた事は甚だ多く記されてあるが。之れ等の事は暫らく省きて。徳川時代に至ては將軍亦斯業を奨励したる故に機業と共に非常の進歩をしたけれども。明治維新前にあつては専ら座繰製糸の方法が行はれたに過ぎない。器械製糸の開始せられたのは實に明治維新後である。即ち上州前橋に速水堅曹なる人があつて。明治元年始めて器械製糸の意見を其藩主に献じ。仍て藩命を帯びて横濱に出で。外人につきて斯業を研究し。三年六月前橋に歸り。瑞西人のシルランを聘して六人取の器械を据ゑ付け。一小工

蠶糸事業

場を開いたけれども。座繰業者の反抗を受けて成功せず。止むなく氏は獨力を以て前橋に一工場を創設したが。これが本年に於ける器械製糸工場の濫觴と稱せらるゝ。次で明治四年に東京赤坂に政府經營の製糸工場が開設せられ。築地にも亦小野組の工場が設けられたけれども數年で失敗した。併し其器械類は甲信地方に送られ同地方の斯業の開発となつた。之れより先き政府は大に斯業改善の必要を認め。調査の結果一大模範工場の設立を企つるに至つた。仍て佛人ビルーネルを聘して地を上州の富岡に相し。明治五年を以て業を開いた。爾來全國の斯業に志あるものは概ね範を此工場に採り。爾來生糸貿易の隆盛を加ふると同時に。各地に器械製糸工場經營せられ以て今日の盛況を呈するに至つた。而して現時斯業の

最大中心地と稱すべきは。信州諏訪湖畔で煙突林立倉庫累々眞に一大偉觀を呈して居る。

一七八

綿 絲 事 業

綿絲 綿糸は棉花植物の果實の纖毛質内皮を原料として之より紡績したるもので。其植物の種類により纖維の長短大小及び品質の良否等一様に行かぬ。一般に纖維細長で品質の佳良なるものは細糸を紡ぐに適し。然らざるものは粗布縫糸等の紡績用として使用せらるゝのである。

抑も綿絲紡績の事業は本邦諸工業中最も完備したもので。其の製品は今や内國の需要を充たすは勿論盛に清國・香港・比律賓諸島に向つても輸出せられ。一ヶ年の輸出額五百萬圓以上

に達し本邦貿易品中殊に重要な位置を占むるに至つた。けれども我が現時の製品は多くは太糸で。印度糸の輸入は全く之れを防ぐことが出来たけれども。機械の進歩發達につれて要求する所の細糸に至りては。依然巨額の輸入を仰がなくてはならぬ次第誠に残念な譯である。

洋式紡績の沿革及び現勢 本邦に於ける西洋式の紡績所の濫觴は。文久元年島津家が該器械を英國より購入し。鹿兒島城下磯村に据ゑつけ。文久三年工場落成したるに始まる。之れより先き薩摩の豪商濱崎大平次なるもの琉球に於て偶々舶載せる洋糸を得て。之を藩主齊彬公に献じた處。藩主喜びて之れを受け。仍て其の何の原料によりて製せしかを尋ねられしに。當時之れを知るもの無く。仍て西陣に送つて其價格を

現今國産の趨勢

一七九

一八〇
 鑑定せしめた。然るに西陣に於ても其原料を判別する事が出来ず。絹綿交糸ならんと想定して評價を附したと云ふ。齊彬公常に此洋糸を見て、將來日本の膏血を絞るものは實に此の糸であらうと歎せられたが、是に至つて始めて紡績機械を英國プラット商會に注文し、米國人某を頼んで、其の工場を建築するやうになつた。

斯くて其後更に一工場を堺に起し、明治三年開業せしものは今の川崎紡績所である。

此頃又鹿島萬平と云ふ人、同志數名と共に、紡績所設立を企畫し、器械を賺ひ、政府の保護を得、將に之が建築を見るやうに至つたが、偶々明治維新に際し、荏苒歲月を經過し、漸く明治五年を以て東京府下瀧の川村に開業した。之れ我國

に於ける私設紡績所の始めである。

斯くて民間に於ても斯業の有利有望なるを認め、政府も亦極力之を奨勵したから、明治十二年には姫路に兵庫紡績所、十三年には大阪府下に澁谷紡績所起り、十五年以後は頓に其數を加へ、現今工場數八十八、毎日平均運轉鍾數約百九十萬本、管絲製造高約五千六百十萬貫に達する。

而して其最も盛なるは大阪府下で、會社數約二十、毎日平均運轉鍾數百十七萬六千本、製造高一千七百萬貫以上に達した。

之に次げるは、兵庫縣で、會社數九、毎日運轉鍾數二十一萬六千本、製造高七百九十八萬貫を出し、岡山、愛知、三重等亦之に次ぐ。而して會社中其産最も多きは、大阪紡績の四

百二十餘萬貫、鐘ヶ淵紡績兵庫工場の二百八十餘萬貫、富士瓦斯紡績小山工場の二百三十餘萬貫、攝津紡績の二百十餘萬貫等で、此他鐘ヶ淵三重紡績知多工場、同三重工場、今津工場、大阪合同天満工場、攝津紡績平野工場、岸和田、尼ヶ崎、攝津紡績明石工場、鐘ヶ淵紡績高砂工場、備前綿絲工場、倉敷、福島紡績福山工場、鐘ヶ淵紡績三池工場等之に次ぎ、何れも百萬以上を製産する。

綿絲輸出と紡績業の將來 本邦に於る綿絲製産は前記の如く、比較的近年の發達であるが、それにも拘はらず、其進歩の迹頗る顯著で、特に日清役後は一大飛躍をなし、明治二十八年には放下資本壹千六百參拾九萬貳千餘圓であつたが、同三十八年には參千六百九拾九萬壹千餘圓に進み、更に同四十

三年には、五千九百參拾壹萬五千餘圓に増加し、其製出額に於ては、明治二十八年の一千八百四十三萬餘貫は同三十八年には四千四百十三萬餘貫となり、同四十三年には、一千六百三十九萬六千九百三十九貫に達した。

然して、此の如く進歩の著しき所以のものは、一は内國に於ける綿絲需要の増加に因るといへども、又一つは太平洋沿岸各地の本邦綿絲需要の増進せるに因らなければならぬ。

支那、香港、比律賓諸島、其の他に於ける本邦綿絲需要は逐年増加の形勢を示して來た。今試に最近數年間の趨勢を擧ぐれば、去る明治四十年に我國から、如上の地方に輸出した綿絲の總價格は、參千百參拾四萬餘圓なりしに、越えて四十二年には四千五百參拾四萬餘圓に上り、更に大正元年(明治四

十五年)には五千參百六拾五萬餘圓に達した。此間明治四十一年及び同四十二年等には若干の減少を來したけれども、大勢に於ては漸次増加の好況を示した。これは本邦斯業の漸盛を來たせし一大原因なりと認むべきものである。

次に過去に於ける本邦紡績業の發達は、上説の如く頗る好成绩を示せしと雖も、將來斯業亦果して此の如く、年と共に發達進歩すべきであるか、問題であるが併し唯其原料たる棉花產出狀況の豊凶と需要に鑑みて、粗製濫造等の弊に陥る事がなければ、回復次第に健全なる發達を遂げ、益々斯業の隆盛を來たすべきである。

棉花輸入 棉絲紡績の原料に供せらるゝ棉花は内地に産すること極めて少きが故に、之が輸入に關しては、關税を免じ

て、大いに保護發達の道を講じつゝあるのである。

最近調査(明治四十四年)によれば、繰綿壹億四千五百四拾五萬五千餘圓である、生綿約參拾貳萬七千餘圓の輸入ありて、其主なる買入先きは、英領印度より繰綿八千七百七拾六萬餘圓生綿參拾萬圓。北米合衆國より繰綿貳千九百貳拾五萬餘圓。清國より繰綿貳千貳百四拾五萬餘圓、生綿六萬參千餘圓、埃及より繰綿五百四拾參萬餘圓、佛領印度より繰綿參拾參萬餘圓、生綿貳拾九萬貳千餘圓。蘭領印度より生綿貳拾壹萬八千餘圓等である。

而して此等は一旦綿糸若くは、綿織物等に製造せられ、更に支那、朝鮮、南洋諸島に向つて、輸出せられるのである。而して輸入棉花といへども、産地によりて、其の品質は同

じではない、例へば印度及び支那綿は太糸の紡績に適し、米
國綿及埃及綿は、細糸の紡績に用ひらるゝが如きである。

一般に紡績用の棉花は其纖維長くして弾力に富み、柔軟に
して純白に、光澤多くして、塵埃少きものを最上として居る。

輸入棉花の得失 輸入棉花中の首位を占むる印度綿は其種
類種々なれども、概して少しく赤色を帯び、纖維短く弾力乏
しく、葉、核其他の塵埃を含むこと多きが故に、十六手、二
十手等の太糸を紡ぎ、又其の質柔軟なるが故に米國綿及埃及
綿を混用して能く細糸を紡出するを得るのである。

支那綿は概して其の色純白にして、光澤に富み、塵埃を含
むこと少けれども、纖維短く、弾力が乏しいから、又十手十
二手等の太糸を防ぐのに適する。

之に反して、米國綿は一般に、纖維が長くて弾力に富み、
且光澤良好なるを以て、三十手、四十手等の細糸を紡ぐに適
し、特に其島嶼又は沿岸地方に産するものは、極めて柔軟で
且つ絹の如き光澤を有し、其の纖維細長にして、世界棉花の
最上品と稱せられて居る。

埃及綿は、更に纖維長く少し赤色を帯びてゐるけれども、
品質頗る上等で、米國綿に劣らない。殊に瓦斯糸の製造には
唯一の原料なりと稱せられてゐる。

紡績器械の發明 現今、盛に行はれてゐる綿糸紡績器械は、
十八世紀後半時代に於て、英人ハルグリーンブス、アークライ
ト、クロムプトンの三氏が相つぎて之を發明改善したもので
ある。

其の後、千七百九十餘年に至り、之に蒸氣力を應用するこ
とを案出し、爾來斯業に對して大進歩を來たすやうになつた。
始めハルグリーブス氏は、嘗て紡車の顛覆せるに、輪錘共
に地上にあつて、尙回轉するを見て起想し、遂に従前唯一粗
糸一錘なるに代へて、八粗糸八錘を備へたものを案出したが、
其の後數年を経て、千七百六十九年に至り、アークライト氏
は水力を利用して、驚く可き快速詳密を以つて棉花を梳し、
且之を紡する所の器械を創製した。
然るに此二氏の發明は互に長短ありて、前者は専ら緯糸を
造るに適し、後者は専ら經糸を造るに適したが、其後十年で
クロムプトン氏は遂によく以上二種機械の長所を折衷した新
機械を造出するに至つた。

爾來幾多の小發明があつて、動力も水力に代ふるに蒸氣力
を以てするやうになり、紡績糸の産出漸く多きを加へて來た
から、其の價も次第に低下し、千七百六十六年に三十八志だ
つたものが、千八百〇六年には七志二片となり、同三十二年
には僅に二志十一片となり、かくて紡績業者は容易に且多量
に織物業者に糸を供給することが出来るやうになつた。
従前の如く織物業者は容易に糸の不足を歎せしむることな
きに至つたのである。

麻 絲 事 業

麻絲 亞麻、太麻、苧麻、黃麻等の植物性纖維を以て製せ
らるゝもの總稱であつて、其細絲は織物用に供し、太きもの

現今國産の趨勢

業 事 絲 麻

は網を製造し又は物の結束等に使用せられる。

麻絲の種類及品質 麻絲を其の原料によつて種別すると左の通である。

(一) 亞麻絲 各種のリンネルに製し、又はレース絲を作るに用ひらるゝもので、亞麻より採取せられたる纖維を原料とする。其の質は柔で強く、晒せば純白で光澤に富み頗る上品である。

(二) 太麻絲 各種の麻布を織る爲に作らるゝもので、太麻の纖維を原料とする。前者に比して品質劣れども需要は頗る多い。栃木、長野、廣島、熊本、宮崎、鹿兒島等の各縣に多く産出する。

(三) 苧麻絲 薩摩上布、越後上布等に織製せらるゝものにし

業 事 絲 麻

て、所謂カラムシと稱するものが是である。苧麻の纖維を以て原料とする。品質は佳良にして光澤に富み頗る珍重せられてゐる。山形、福島、奈良等の諸縣からは其の産出が多い。

(四) 黄麻絲 包布、袋布若くは粗布の緯絲等を使用せらるゝものにして、黄麻の纖維を以て之が原料とする。而して之が纖維を取扱ふには乾燥し易きが故に、油を以て柔軟ならしめ、後紡績を施すのである。絲質堅牢ならざるにはあらざれども、濕潤に堪へざるの缺點がある。

(附) マニラ麻、之は其の名稱によりて、直ちに麻絲の一種であると信するものなきにあらざれども、元來マニラ麻なる纖維はアバカと稱する芭蕉の一種から採製するもので、フィリッピン諸島並にモルツカ諸島から輸入せらるゝものである。

其纖維の精細なるものは多く織物と成し、粗大なるものは網索とする。

一九二

麻絲の製法 麻絲の製法は先づ其原料たる麻俵を解き、束を揃へ、其纖維中の護膜質を酸酵せしめん爲め、植物油と植物油との混合油と曹達液とを和したるものを撒布し、數日の後鐵製ロール機械等によりて其の纖維を柔軟ならしめ、次に刷梳機にかけて其纖維を長線、經線の二種に類別し、更に接續機及び延線機によりて、漸く均一なる篠となし、最後に整紡機によりて、之を撚り、爰に始めて麻絲を得るものである。以上は近時行はるゝ所の機械紡絲の方法なれども、往時は皆婦女の屋内手工業として營れたものであつた。

機織事業

織物 織物は長絲を用ひ、織機によりて經緯を組織して布帛となしたるものゝ總稱で、原料上より分つときは絹織、毛織、綿織、麻織、交織等となり、組織上より分つ時は、平織、綾織、縐子織、縮織、透織、天鵝絨織等によることが出来る。其他用途の如何によりても亦種々に類別し得らるゝのである。抑も本邦織物業は太古より開けたる所のもので、近年機械織的工業の進歩と共に、染色機業に關する事業も大に發達し、年々之が盛況を見るに至り、我國工業中の首位を占むると雖も、之を歐米諸國のそれに比すると尙未だ非常なる遜色あるから、國民は大に之が改良を圖り、發達を講せねばならぬ。

現今國産の趨勢

一九三

機 織 事 業

例へば本邦第一の國産と稱らるゝ生絲の如き、之に幾多の製作を施し、機織を加へ意匠を練り、以て海外輸出を圖らば其の收益も尠少ならざるに、空しく原料的貿易品として、之を外人に賣り捌かざるを得ざるの境遇にある如きは、畢竟未だ手工的時代を脱却して機械的大工業に到達せざると。彼等歐米人の嗜好に投ずるを得ざるの致す處である。而して斯業に従事するものゝ大に講究研鑽すべき處ではなからうか。

本邦織物業の現勢及び未來 現今本邦織物製造業に従事する戸數は、植民地を除きて、凡そ四十五萬戸にして、其機數は凡そ七十五萬餘臺、平均一日使用の男女織工約七十六萬餘人、製造高年額約貳億四千七百餘萬圓に達してゐる。即ち一戸平均約一臺半強の機を使用し、毎日一人半強の職工を役し、

機 織 事 業

年額平均約毎戸五百五十圓宛の織物を製出する割合であるといふ。而して之を十年前に比較するときは、全國製造戸數に於て凡八萬五千を増したる外、機數及び職工に於ては大差なく、而も製造高に於ては、約壹億圓に達せんとする増加を示せるは一段の進歩と云はねばならぬ。

けれども顧みて貿易の狀況を一瞥すれば、大正元年度に於て生絲及綿絲の總輸出額は實に貳億〇五百餘萬圓に上れるにも拘はらず、織物の輸出額は總計僅に五千五百八拾六萬圓に過ぎずして、絲類の輸出額の約四分の一に相當せるに過ぎない。然らば即ち此等の生絲を以て、更に織物となし、外人の嗜好に投合する様作製し、年々意匠を新にし、製品を吟味し、以て諸外國の需要に應ずることゝせば、斯業の漸次隆盛に赴

くは勿論、當業者并に邦家の利益亦少からざるべきである。これ實に斯業に關係を有する人士并に資本家等の當に大に注意して攻究を要すべき點である。

本邦機業の改良 (一)機械力の使用を盛んにすべき事、本邦の織物業は概ね民間農閑の副業なれば、其製品も亦同一のものを多量に得る事は難く、價格亦低廉ならざるの恐れは少ない。今後は一層水力、電力若くは蒸氣力を利用して、機械的大工場を起し、以て製作品の均一と價格の低廉を期せねばならぬ。

(二)染色を均一ならしむる事、機業と染色とは互に相俟つて、始めて織物業の進歩を來すものである。蓋し染色にして不均一不統一であつたなら、機業如何に精巧を極むと雖も、品位

劣等にして、到底需要の嗜好を満足せしむる事は出來ない。

(三)褪色を止むべきこと。染物の不同なるは織物の品位に關する事が多いのは勿論だが、本邦の染物業は、猶未だ幼稚にして變色し易く、永久に堪ふる能はざるもの多きが如きは、均しく織物の價值を失墜する事が少くない。彼の優良なる露西亞更紗等の如く、洗へば洗ふ程其色彩を加ふるが如くなるべきである。

(四)品質の優良なるべきこと。織物は其の原料の精粗及び組織の如何によつて、品質の良否に影響を及すことは頗る夥しいものである。蓋し織物の品質をして同一ならしむる能はざるは、本邦機業家の缺點であつて、其販路を擴張する能はざる一原因である。本邦機業家たるものは大いに注意を要さね

ばならぬ。

一九八

(五)嗜好に適せしむべきこと。何れの商品を問ず、單に内國の需用を充すのみにては、十分の利益を得る事は出来ないのは勿論であるから、之を世界に廣く販賣して其の需要範圍を大ならしめなければならぬ。然るに本邦絹織物の如きは其尺巾模様等、彼の歐米人の嗜好を顧みざるもの多く、非常の辛苦になつた製品も空しく一笑に附せられたものも少くない。本邦機織業家たるものは、よく茲に鑑みて、彼等の嗜好を察して、十分之に適合せんことを求めねばならぬ。これ本邦機織業改良上最も着眼すべき一要點ではあるまいか。

織物機械の發明 近代に於けて機織業は頗る目覺しき進歩をしたが其の始めは、英國ケントの僧カートライト博士の功

績にありとする。氏は元來織物業等には少しも關係を有してゐない一收師であつたが。熟々織布の技の器械力を應用し得らるゝを見て、苦心の結果漸く粗末なる織物業を造り、實地研究を積んで幾多の改良を加へ、千七百八十七年遂に其の機の特許を得るに至つた。

其後十數年を経て千八百一年に至り、佛人ジャカード氏は絹布に圖紋を織出す所の自動機業を創造し、針をして厚紙上の孔を刺さしめ、之によつて如何なる紋様と云へども自由自在に器械力によつて織り出し得るに至つたのである。斯くして機業上に非常なる進歩を來した。

其後織物の主要の原料たる棉花の漂白法の改良せらるゝあり、又染色法の改良進歩を促せるあり、かくして既に實地上

の奏功せる紡績機械の盛んなる、運轉と各々相俟つて互に改良せられ、遂に現今機織業の一大發展を見るに至つたのである。絹織 一に絲織ともいふ。其の産地の有名なるのは京都であつて、之に次いでは近江の長濱、丹波の峰山、羽前の米澤、筑前の博多、加賀の金澤、上野の桐生、下野の足利、武藏の秩父及八王子、羽後の秋田等である。而して本邦中其の産出の夥しきは、明治四十三年に於て、福井の貳千貳百五拾餘萬圓、京都の千八百四拾餘萬圓、石川の千貳百拾餘萬圓等にして、其他群馬、東京、新潟、福井、山形等は何れも五百萬以上にて、埼玉、山梨、岐阜等は何れも貳參百萬以上の産出である。

絹織物中其主要なるものを擧ぐれば羽二重、奉書紬、黄八

丈、斜子、絲織、銘仙、節織、太織、秩父、郡内、博多、琥珀、仙臺平、五泉平、一樂、八橋、鹽瀬、縹珍、綸子、風通御召、縮緬、畝織、厚板織、金襴、緘、綾錦、揉絹、岸縞、吉野織、飯能絹、紬、加賀絹、練絹、繪絹、武州平、純絹、八端、龍紋、練、紗、平上布等である。

木綿織 綿布は價格低廉にして、地質頗る堅牢なるが故に、本邦人の被服としては最も適當なものであつて、従つて其の産出額は本邦各種織物中の首位にある。之れ等は本邦自然の氣候が然しむると、一は生活の程度、斯くあらざるべからざる境遇にある事に因るのである。然るに近年國民漸く奢侈に赴き、稍もすれば絹布を纏ひ、邊幅を飾り、綾羅を着て以て虚飾に陥らんとする傾向がある。されば本業に志すものは益

二〇二

々品質を精撰し、機織を改良して、以て絹綿相争ひ耐久、美麗、廉價、堅牢等の諸點に於て十分優良ならしめんことを圖らなければならぬ。而して各府縣中其産出の夥しきは愛知の一千七百七拾六萬圓、大阪の壹千七百拾萬餘圓等であつて、和歌山、三重の壹千萬圓之に次ぎ、其他埼玉、栃木、兵庫、愛媛等は五百萬圓以上を出し、東京、静岡、新潟、奈良、岡山、廣島、徳島、福岡等何れも貳參百萬圓以上の産がある。木綿中其の主要なるものを擧ぐれば、緋、唐棧、雙子、瓦斯絲織、瓦斯博多、瓦斯海氣、瓦斯八丈、綿御召、保多織、小倉織、眞田織、手拭地、銚子縮、岩國縮、上州縮、阿波縮、雲齊織、鳴海絞、更紗、津緩子、縹帶布、縹上布、蚊帳地、帆木綿、紋羽織、段通防水布、遠州縹等を數へらるゝのである。

絹綿交織 絹綿交織は外見紹織に類し、價格は頗る低廉なる故に、大に世人の嗜好に適し、需要供給の原則に伴ひ、其技術も次第に進歩して、愈々精巧のものを出すに至つた。しかし稍もすれば品質粗悪にして褪色し易きものがあつてから、斯業家は進んで之が改良を圖り、以て事業の發展を講せねばならぬ。而して本邦各縣中その産額の最も多いのは栃木の五百五拾六萬餘圓、愛知の五百貳拾餘萬圓にして、埼玉、群馬等之に次ぎ何れも一ヶ年貳百萬以上の産出を見るのである。絹綿交織中、其主要なるものを擧げると、綿縹子、縹縹子、觀光縹子、綿天鵝絨、畦織、新縮緬、綿錦、綿金襴、觀光縮緬、絲御召等である。

麻織 麻布は夏日の衣服として最も適良である故に、古來之を使用するもの亦頗る多い。而して之が原料たる麻絲は既に述べた如く、亞麻、太麻、苧麻、黃麻、ラミー等の植物の纖維から得るものであつて、本邦にては主として太麻を耕作してゐる。近年麻織物の需要の旺盛なると共に、之が原料の缺乏を來し、麻、苧の輸入するもの漸く多く、年々數萬圓の多きに達し、其額次第に増加しつゝある。而して本邦麻織物中其産額最も多きは、滋賀の壹百參拾餘萬圓にして、栃木の貳拾萬圓之に次ぎ、其他新潟、奈良、兵庫等何れも拾數萬圓を出してゐる。

麻織物中、主要なるものを挙げると、薩摩上布、越後上布、近江晒、蚊帳地、奈良晒、野州晒、生平、ズツク、リンネル

洋服地等である。

毛織 毛織物は元來牧畜業の發達せる地方に製出せられるものにて、本邦に輸入せられたるは近代の事であると云ふも漸く邦人の嗜好に投じ、逐年海外からの輸入を増加し、現今尙年々壹千數百萬圓の毛織物を輸入してゐる。而して其本邦に於ける製産も又極めて近年の事に屬し、一般世人の最も需要多きモスリンの如きも、去る明治三十一年十月、大阪府西成郡中津村に業を開始せるモス綸織株式會社の製造品を以つて嚆矢とした。爾來東京、京都其他に毛織物工場興り、其産額次第に増加し今や壹千九百萬圓の製品を出し、漸く輸入品を減退しつゝある。

毛織物の主なるものには、モスリン、毛布、各種羅紗類、

業 事 織 機

セル、毛織鹽瀬等である。

雑布 絹、木綿、麻、毛以外の繊維にて織出されたるものであつて、芭蕉布、葛布、紙布等之に属するものである。

芭蕉布、沖縄縣の特産物にして、芭蕉の繊維にて製したる平織ものである。縞物、緋物等の區別がある。夏季服に用ひて宣し、蓋し此の織物の如きは、暑威酷烈なる地方にあつて氣候上自然の必要を感じて遂ひに手工の熟練をなし、よく精細の繊維を製出して、原料、組織共に宜しきを得、柄様も又愛すべきものを産するに至つたものである。

葛布 主として襖地に用ひらるゝものにして、綿絲又は絹絲を徑とし、葛の皮から採りたる繊維を緯としたる平織である。静岡縣掛川地方の産を佳とし、往時は夏の褥又は合羽等

地 方	数		價 格
	組	織	
本州中區	三、七〇、七九四	四、八、七三三	一、四、六、九、七三三
本州北區	三、五、一、九三五	四、七、二二六	一、八、三、〇、五三一
本州西區	二、九、三、〇九一	三、六、八、七四九	三、〇、五、六、五〇
四國區	三、八、四〇	一、〇、六、七三	九、四、五、九、六
九州區	一、四、七二	四、九、〇一九	四、七、二、四、七
沖 繩	一、〇、三、三九	三	三、七、一、四、九
北 海 道	四、四、五、四、五	—	四、六、四、九
總 計	一、八、三、八、四、三七六	四、三、八、五、四、五〇	二、四、一、〇、七、二、六、六

愛すべきものを産するに至つたものである。
 葛布 主として襖地に用ひらるゝものにして、綿糸又は絹糸を徑とし、葛の皮から採りたる纖維を緯としたる平織である。静岡縣掛川地方の産を佳とし、往時は夏の褥又は合羽等

地方	絹		絹綿交織		綿		織		麻		其他機		價格計	
	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格		
本州中區	三五,九〇〇	反	八,七九四	反	一六〇,五〇〇	圓	七〇,三七七	反	五〇,九四四	反	二,三三四	反	一四,六九七	圓
本州北區	二五〇,五三三		三,五四六	丸	四九,七七七		五〇,四七七		四〇,六七三		六〇,五六		一八,三五五	
本州西區	二,四七三	六	八,五三〇		四,三八五		四,三七八		四,四九三		六,一四		三,七六〇	
四圍區	一九,八八		二,六七三		三,七六七		九,七三九		九,六八五		三,八四〇		九,四五九	
九州區	七,八八六		五,三〇七		二,八七九		二,四五九		四〇,九五六		九四		四,七二四	
沖繩	五,四〇〇		三,五二〇		一,五〇〇		三,三七七		二,五二〇		一〇,五三三		七,二四九	
北海道	一,八五六		一,六四九		一,五		一,五		二,四八二		二,四八二		四,六四九	
總計	一,八三四	六	九,七六〇	三	二,一〇七	七	二,三〇七	六	二,三九五	六	三,〇七	四	二,一〇七	六

紙布

機織事業

にも使用せられた。

紙布 仙臺、熱海等の名産にして、綿絲を経絲とし、楮紙
 雇皮紙等の小撚を緯絲として平織に製したものである。被布
 合羽、帶地、半襟其他に供用せられてゐる。

地 方	製 造 戸 數	機 數	平 均 一 日 職 工
本州中區	一九九、九五九	三五〇、八五八	三六〇、七〇二
本州北區	四九、九二九	七八、〇二五	七九、〇五〇
本州西區	一三七、二七一	二〇六、〇四五	二一三、四六〇
四國區	五七、七〇七	七六、七三九	七二、六三九
九州區	三四、三七八	四九、〇九一	四九、四二一
沖州蠶	八、六五七	九、九八二	一〇、六〇九
北海道	三四	一九六	一五七
總計	四八六、九三六	七七〇、九三六	七六九、一三八

現今國産の趨勢

てき就にルセ紗羅

羅紗、セルに就きて

内地生産の増大 毛織物中羅紗とセルは、洋服外套著尺用として既に普通的衣類の性質を帯び將來益々需要の増加を來す可き者であるから、之の經濟的供給如何は我生産界の重要懸案たると共に亦頗る興味ある研究問題といふべきである。先づ是を我國刻下の所要年額に付いて看るに壹千五百萬圓乃至貳千萬圓は動かす事の出來ない處で之に對しての内地生産高を上げると左の通りである。

▲内地生産高

明治四十三年
同 四十四年

二、七五九、三四〇圓
五、九五六、六〇七

てき就にルセ紗羅

大正三年(豫想)

一〇、〇〇〇、〇〇〇

右の中で本年豫想の生産は著尺セル同フランネルの製造を爲さる陸軍製絨所外民間の四會社(後藤毛織、大阪フランネルの兩會社を除く)の資本總額に依つて推定したものであつて、現工場を更に有効に利用する時には尙參百萬圓内外の生産増加を得可き見込みである。

最近輸入の趨勢 更に輸入の状況を見ると内地の生産が年々異常の進歩發展を遂げつゝあるのに拘らず需要額の増進は今猶壹千萬圓の輸入を要して内地生産も同じく壹千萬圓を豫想せらるゝ今日に於ても今年一月以降九月迄の輸入累計既に八百貳拾參萬貳千圓に上つてゐる。最近五年間の輸入統計は左の通りである。

現今國産の趨勢

▲大正三年輸入額

自一月至九月	前年同期
八三三,〇〇〇 _圓	九,〇五二,〇〇〇 _圓
	減八,〇〇〇,〇〇〇 _圓

二一〇

▲大正二年度輸入額

仕出 國	純毛物	混毛物
英 國	三,九四三,七六〇 _圓	四,三四二,二五〇 _圓
佛 國	六二,〇六六	六〇,四四
獨 逸	六八〇,八八五	九一六,二三〇
白 耳 義	六二,八四七	二八,五五九
埃 耳	一一,〇八一	七,六九五
洪 耳	二四,四二〇	三二,三四九
和 國	二六,四七一	八七,〇九六
伊 太 利		

其 他	計
二,八八七	(四,七三三,六〇五方碼)
二,四五六	(九,七三三,九二一方碼)
五,六六五,〇四七	四,四九六,五七六方碼
四,八二四,四二九	一〇,四七八,四七〇圓
合 計	

▲大正元年度輸入額

六,九〇三,八五六圓

▲明治四十四年度同上

一〇,六五六,一六七

▲同 四十三年度同上

一〇,〇五七,三四〇

即ち大正二年度表に依れば英國は輸入の大部分を占め獨逸は之に次いでゐるが、各年の輸入率は毎に同様の割合にて之が種類別は左の通になる。

▲純毛冬物 綾羅紗被布地、撚糸、本羅紗縞物、黒一本綾、霜降羅紗、

現今國産の趨勢

二一一

實質を買
つてやれ

▲純夏物、ボーラー、ホームスパン、縞及霜降セル、黒紺セル、

▲混綿冬物、縞メルトン、立綿メルトン、縞軍艦羅紗、黒メルトン、縞スコッチ、被布地、縞一本、撚糸、

▲混綿夏物、縞防水、縞セル、ホームスパン、

實質を買てやれ 爾來内地品が技巧に於て種類の多様な點に於て到底外國品の敵に非ざる如く思惟されたのは、研究上幾多の缺陷のあるにも依るであらうが、之を一面から觀察する時は外國品崇拜の結果内地製造業をして十分に其經綸を行ふ能はざらしめたるの罪に歸せなければならぬ。唯輓近内國品需要の激増せると同時に日本毛織、東京毛織、東京製絨、後藤毛織等から縞セル黒メルトン、軍艦羅紗、或種のメ

ルトンの良質を出してゐる。殊に縞セルの如きは後藤毛織並びに名古屋地方の工場にて外國品に比肩すべき良質を製造するに至つたのは、輸入品防遏の一新紀元として、慶賀に堪へざる處である。而して以上各種以外の製品は今後生産の増加と共に漸次進歩發達を遂ぐべきは勿論であるから、既に各種を通じて耐久力に於て外國品を凌駕するの域に到達せる一事は、此の際内國品の爲に一層の光彩を副ふるものと云はねばならぬ。

一般國民が内國生産助成の誠意を以て大に其實質主義の點を買つてやるといふ風潮を作るなれば、生産費を低減して經濟的供給の途を拓くに至るのみでなく技術上外國品の壘を摩するの日も近き將來に期待し得らるゝのである。尙上掲大正

二年度輸入表中安物の混綿製が上物の純毛製に約倍せるに徴しても外國品は品質主義に依つてのみ輸入さるゝに非ずして因襲の情勢に依る者尠からざる事を察知し得られるのである。

輸出の前途如何 轉じて輸出状態を看ると、羅紗又はセルジスとして生地の儘の物よりも洋服として輸出するもの多額を占め大正元年度には支那制服制定の事があつたので、同國への輸出百四十萬圓の多きに及んだ。而も近年の統計は銀の低落支那革命後の疲弊等に依つて、何等發展の跡の徴す可きものなきは遺憾であるけれども内地に於ける輸入防遏の一事と共に其の前途の好望なるは絮説する迄でもない事である。因に最近の輸出統計を左に掲げる。

▲輸出羅紗及セルジス

仕向先	大正元年	大正二年
支那	二二,五〇〇 <small>圓</small>	二七,四七六 <small>圓</small>
關東	六九,〇四四	四九,四九九
香港	四,七三三	二,二八九
其他	七〇六	九一
合計	二四五,九八一	一八〇,一〇五

▲輸出洋服

仕向先	明治四十四年	大正元年	大正二年
支那	四八,九二	一,四一五,五〇一	四一,八二三
關東	二二,三,九八〇	一四一,五七〇	一一,八六二
香港	二〇,六六〇	二九,六五三	五,三三九
英領印度	一〇,四八	一七,四九八	二六,九九八

現今國産の趨勢

英領海峽植民地	八七〇	八八〇四	六八〇四
蘭領印度	六〇八二	六五八二	八七九五
英國	九、九八五	二、三、四六六	六、一九九
英領亞米利加	一三、四五六	一、八五四	一八、六〇九
濠洲	三、六七八	三、六三三	三、七、五五三
埃及	一、二八一	三、八二四	二、〇五〇
其他	四、八八〇	三、四〇七	三、四、六八六
合計	四八、五五五	一、八三、五六五	四、五、九二二

二一六

毛織物と羊毛 羊毛はモスリン其他の毛織物材料として、千六百萬圓の輸入をして居るため、政府も羊の飼養を奨励し出した。洋服地にしても和製は技巧の熟練が足らぬ爲め同じ似よつた物を製つても綺麗に垢抜けがしない代り保存から云へば和製品の方が強いと云ふ事が確である。然し安物の縞、

黒メルトンは昨年から全く舶來品を驅逐し其他の中等品でも本職の洋服屋でさへ舶來品と思つて和製品を取扱つてゐる程巧みな物が織出される様になつた。

日本の毛織工場では未だ分業が發達せぬ爲め、極上品と極悪品の製出が困難な丈であつて、中等品だけは最早和製品で供給が出来る様になつた。昨年でも支那の百八十萬の輸出をして居るので、原料は何も濠洲から來るので製造業には保険率の外に打撃はないのである。

製糖事業

生産地 本品は主に關西地方に製産せられてゐる。中でも四國九州が主な産地である。其他沖繩、鹿兒島の二縣では全

現今國産の趨勢

二一七

二二八
 國總産額の約八割を産してゐる。其他は香川、東京、熊本、高知、徳島、愛媛、長崎等の諸府縣が有名な産地である。全國を通じての製品は大部分黒糖と白下糖の様な粗製品であつて。去る三十九年頃であつた、東京府下南葛飾郡砂村に大日本製糖株式會社が設立されつゝいて大阪府下日本精糖株式會社及び福岡縣下の大里精糖株式會社が合同したので、精製糖の産額著しく増加する様になつたのである。而して最近の調査によつて見ると、同社三工場の拂込資本金が約貳千五百萬圓である。臺灣と外國産の粗製品を原料として其精製品の第一種から五種に至る迄總量が七千餘萬斤であつた。そしてその價額は貳千五百萬圓の多額を産出する様になつたのである。
 全國砂糖産出高特製糖を除く

明治四十年 八三、二八四、三〇二斤
 同 四十一年 八九、九九〇、五二三
 同 四十二年 九八、〇二四、五一八
 同 四十三年 一〇九、五四七、一四一
 先づ主産地としては沖繩縣をあげねばならぬ。本縣の輸物産中の第一に位してゐる。従つて其豊凶は縣下經濟の消長に關する事が最も大なるものである。而して其起原は今から凡三百餘年前、琉球國尙豊三年、元和九年であつたと云ふ。それ以來連續して今日になつたのであるが、藩政時代には人民生活上必要の農産物のみを重視してゐたので、甘蔗の栽培は面積に制限がされてあつたが、縣を置れてからは間もなく其制限が解かれた。そして寧ろ之を奨勵したのである。是が
 現今國産の趨勢

爲めそれ以來著しく進歩して其製造上にも種々の改良が施されたので其生産額も非常に増加した。原料の甘蔗は縣内の産品を之に充て、る従つて甘蔗の耕作者即ち製糖者であるから原料を供給する上には誠に便利である。製品は上記の如く黒糖大部分を占めてゐる、而して大阪、神戸地方を主なる販路としてゐる。主産地は鳥尻、中頭の兩郡である。次に福岡縣は大日本製糖株式會社の大里工場の生産してゐるものがある。同社は明治三十七年神戸市合名會社鈴木商店の設立した者である。元は大里精糖所と稱してゐたが、前述した如く四十年合同して今日に至つたのである。尙粗糖の産地は朝倉、浮羽、八女が主な産地である年額は五六拾萬圓を算してゐる。しかし何れも農家の副業であつて其規模は誠に小さなもので

ある。最近に於て斯業の産額の著しく増加したものは東京である。而して是等工場は府下全部に二百七十八箇所の多數がある。其中有名なのは大日本製糖株式會社であると云はねばならぬ。同社は明治二十九年一月資本金六拾萬圓を以て創立せられた。そして日本精製糖株式會社と稱してゐたが、三十九年十一月在大阪日本精糖株式會社と合併して資本金を壹千貳百萬圓として現今の社名に変更したのである、四十年八月更に福岡縣下大里精糖所を買収して大に規模を擴張した。而して同社の原料は大部分臺灣及び南洋瓜哇産の粗製糖を用ひてゐる。以上の外に府下の主なる精糖工場は小林彌兵衛氏と松屋商店であつた。そして四十三年中の産額前者は二百萬斤貳拾壹萬餘圓、後者は貳拾四萬圓に達した。

府下粗製糖の主産地は小笠原島であつて、四十三年貳拾萬餘圓の産額を示した。鹿兒島縣の大島郡も主産地である。熊毛、肝産、鹿兒島、出水の諸郡何れも多少の産はある。其起原は、今から三百餘年前であつた。大島郡の大和濱方に川智といふ人があつた。琉球に航せんとして海上颶風に逢つて支那に漂着して了つた、爲めに數年間甘蔗の栽培と、製糖の術のを習得した。そして歸來後之を今の大金久村西濱に試植した處好果を得たので遂に全島に普及したのである。斯くて漸次發達したものである。大島郡では去る三十五年から三十九年にかけて、毎年參萬圓國庫の補助を得て原料の改良増産及び製糖技術練習等斯業の發達に關し施設した結果、大に面目が改められ、更に四十年から糖業改良事務局出張所を本島に

設置された。爲めに其の改善指導をなし、縣も亦多數の技術員を同島に配置して之が奨勵に努め益々將來の發展を計ることに努めてゐる。

大阪府の精糖株式會社大阪工場は。去る二十九年設立の日本精糖株式會社の合同したものである。そして其後漸次事業を擴張し現今の盛況に達したのである。粗製糖は主に東成郡に産してゐるが、泉北、泉南、南河内の諸郡に多少の産出はある。次に熊本縣にも多少の製産がある。本業は主として農家の副業で規模は誠に小さい。そして家内工業に屬してゐる。その製品の全部は殆ど粗製の黒糖である。主産地は天草郡で地質も氣候も凡て甘蔗の栽培に適してゐるので、製糖に従事するものが多い。そして宇土郡は之に次いで産地である。

又高知縣にも多少の製産を見る。斯業の起原は天正八年のころ國主長曾我部元親から織田信長に製糖を献じたことがあるといふから、その當時から既に製糖業が行はれてゐたものと見える。

一般に甘蔗栽培を奨励され出したのは寛政の頃である。藩廳で其事業を經營したが、享和年間に民業に移した。斯くして次第に盛況に向つたのである。徳島縣にも舊藩時代板野郡引野村の徳彌といふ人が甘蔗を栽培して砂糖を製し始めた。藩主は是を知つて其來歴を尋ねた。徳彌は答へて日向地方の糖業の状態から當地の甘蔗栽培に好適地であり將來の國益として充分見込みのある旨を述べたので初めて同人をして其の栽培及び製法について廣く各人に傳授せしめたのである、斯

くして次第に發達して今日に至つたのである。三十九年以降阿波砂糖同業組合が設けられ、益々斯業の改善を計つてゐる。主産地は板野、阿波兩郡及び徳島市にも多少の産がある。長崎縣にも製産地の南高麥郡がある。其産額は縣下全體の約九割を占めてゐる。其他にも東彼杵西彼杵に多少の産出がある。その需要は縣下及び隣縣であつて製品は大抵全部黒糖である。宮崎縣にも。宮崎、兒湯の兩郡には多少の製産がある。製品は白下糖と黒糖である。工場は家内工業に屬してゐて何れも規模は小さい。静岡縣には濱名郡が主産地である。で全額の過半は同郡の産である。其他安倍、小笠の二郡が之に次いで

の産出地である。製品は白下糖が主で年々百餘萬斤貳拾餘萬圓に達してゐる。

以上の外の諸府縣の稍重きを置くべき産地は岡山、廣島、和歌山、大分等の諸縣である。

砂糖類の輸出入 輸出される精糖は大抵清國の各地即ち上海、漢口、鎮江、天津等である。本邦製精糖は、香港糖よりか種々な點から同國人に歓迎需要されてゐる。従つて將來本邦糖業の輸出も次第に増加するであらう。

輸入糖は粗糖と精糖のみであつて、精糖の方は今迄も香港や蘭領印度から多量に輸入してゐたが、近頃非常に減少して最上品の少額の輸入のみであるといふことである。

麥酒釀造業

麥酒の主産地と其沿革 我が邦の麥酒釀造は、明治八年十

月東京に起つた櫻田ビールが最初であつた。續いて明治九年北海道に札幌ビールの開業されたのである。當時はビールの需要はまだ開けないので、釀造の方法も不完全であつた爲め、専ら輸入品に依るものが多かつた、釀造の進歩と共に漸次其需要も増加し、明治二十年九月には、日本麥酒會社が起つた。續いてキリン、旭、東京等の諸麥酒會社の設立を見るに至つて。而して我國のビールは何れも獨逸、埃太利等を範とし、漸次東洋の主産地たる盛況を呈した。加ふるに歐米人の嗜好に適したので益々需要は増加した。現今に於ては全く輸入を防ぐのみならず、盛んに海外にも輸出するに至つたのである。而して其主産地は別表の如く東京、大阪、愛知、北海道等である。

全國累年比較		產地	製造場	産額 (四十四年)
明治三十八年	一三三,四一〇石	東京	二	七〇,四五九
同三十九年	一九九,三六六	神奈川	二	三二,二六
同四十年	二〇一,二四四	新潟	一	—
同四十一年	一三三,三九六	愛知	一	一七,八五九
同四十二年	一五〇,八三三	大阪	一	四九,四一九
同四十三年	一五七,七四一	兵庫	一	九七七
同四十四年	一七六,六六〇	北海道	一	九,八三〇

東京では、府下に現今醸造場二ヶ所、即ち大日本麥酒會社
目黒工場、同吾妻橋工場の二ヶ所である。

大日本麥酒會社は、本邦に於ける斯業中最大なるものであ

つて、即ち従來の日本(惠比壽)札幌及び大阪旭の三會社は斯業
の將來の發展を計る爲め、徒らに國內の競争を避けて大に海
外の輸出を圖るを目的として、去る明治三十九年一月合同を
見るに至つたのである。本店は東京府下目黒で、大阪及び札
幌を支店としてゐる、又東京、名古屋、大阪、福岡の各市に
出張所を設けて、販賣其他營業上の事を司どり、工場は上記
東京府下の二ヶ所の外に、大阪の吹田、北海道の札幌、神奈
川の保土ヶ谷の五ヶ所である。何れも合同後製品の改善に努
めて大に販路を増加するに至らしめた。

目黒工場は府下荏原郡目黒村にある。明治初年に創業され
たものである。日本麥酒株式會社として従來久しく關東地方
に於いて、斯業の覇を稱してゐたが、前述の如く去る三十九

年大阪、札幌の三會社合同し益々事業を擴張して今日に至つたのである。又札幌麥酒會社の分工場として、東京市内本所區に設立されたる吾妻橋工場も合同と同時に、同社の分工場となつて、目黒工場と共に年々其産額を増加して、内外の需要に應ずるに至つたのである。次に神奈川県の麥酒醸造業は即ち麒麟麥酒株式會社を以て主要なものとする。本社は横濱市内山手町にある。去る明治二十一年に創立されたものである。爾來漸次規模を擴張し資本を増加し、現今では貳百五拾萬圓の資本で營業に従事してゐる。で斯くして大に品質の改良に努めた結果、次第に世の嗜好を増し、今では關東地方は云ふに及ばず關西各地に於ても到るところに多くの需要を見るに至つた。愛知縣は知多郡半田町加富登麥酒株式會社工場

に於て醸造せらるゝものである。同社は元九三麥酒會社と稱してゐた。去る明治二十九年に創立されたものである。始は資本金四拾五萬圓を以て事業に従事したのであつたが、社會の進歩と共に麥酒の需要も著しく増加したから、到底小規模の計畫では甘んずる事が出来なくなつて、愈々三十六年末に至つて資本金を參百萬圓とした。同時に東京に本店を、支店及び出張所を大阪、名古屋に設け、從來の會社を醸造工場とし大に事業の擴張を計つたのである。その結果、次第に隆盛になつて、現今では男女職工約百二十名を使役し、其産額百餘萬圓を算してゐる。

原料の大部分は外國産である。就中ホツボ、麥芽の如きは全然獨逸産を用ひてゐる。製品の販路は内地を主とし、其他

支那・朝鮮及び新嘉坡方面に輸出せられ次第に其増加を示しつゝある大阪府の麥酒産出は、三島郡吹田町の大日本麥酒株式會社工場の醸造に係る者で、同社は明治二十年の創業である。同二十五年始めて朝日ビールの名にて全國に發賣したのである。當時は其規模も小さかつたので容器なども舶來麥酒の空瓶を使用してゐた有様であつたが、逐年産出の増加と共に二十九年に至つて製瓶所も設置され、同時に製品及び販路の擴張に勉めてゐたが、三十九年に至つて前記の如く三會社合同となつて、現今の盛況を呈するに至つたのである。

原料たる麥芽の或る部分は當工場の製産品を用ひてゐる。部分は關西、九州地方を主とし、全國各地及び海外に輸出せられてゐる。又兵庫縣にも麥酒は川邊郡尼ヶ崎關西洋酒醸造

所の生産に係るものがある。同所は去る三十八年に創業され現今職工約二十名を使役してゐる。其製産額は年々九百餘石であつたが、四十三年には産額は九百七十石の増加を示してゐる。又北海道には麥酒醸造場即ち前記大日本麥酒會社の札幌工場である。今其由來は明治九年開拓使が創設したものである、同十九年民業に移つて札幌麥酒株式會社と改稱して、三十六年舊札幌製糖會社の建物を買収した。同三十九年に至つて、前述の如く三會社合同となつたのである。

同年更に大規模の擴張工事を起して四十二年に漸く完成したのである。即ち現時の工場がそれである。

而して最近の従業員の數は約百三十名である。製品は札幌ラガ麥酒、札幌黒ビール、ミュンヘンビール、生ビール等で

麥酒醸造業

内地の外海外殊に浦鹽方面の輸出が盛んである。又麥芽工場では床上式及び「トロムメル」式に依つて是が製造に従事してゐる。最近の一ヶ年製造高は百六拾五萬キロに達してゐる。以上は、現今本邦に於いての斯業の概要を述べたものであるが、最近福岡縣下大里地方にも醸造場の新設されたものがあるから、將來は益々其製産増加するに至るであらう。
麥酒原料の輸入 原料品の輸入麥芽及びホップにして、内地に於ては前記の如く、大日本麥酒會社が自家使用原料として、之を製造するだけに過ぎない。而も其製造高は、未だ以て同社使用の全部を充すことは出来ないのである。其不足は依然外品に依つて他の醸造場に於ては全然輸入品に其供給を仰ぐのである。

麥酒醸造業

一、麥芽の輸入額

國名	明治四十三年		明治四十二年	
	數量	價額	數量	價額
獨逸	二二七、五〇〇斤	二四、六五六	二二五、二〇〇	二六、七六四
埃甸利	一、六二一、〇二六	一七三、二九四	一、四〇〇、五九一	一五七、八七二
英吉利	—	—	七五、五四四	八、九三六
計	三、七九三、五四六	四四四、九五二	三、七九一、三二六	四三三、五七二

二、ホップの輸入額

明治四十四年		明治四十三年		明治四十二年	
數量	價額	數量	價額	數量	價額
—	—	三三〇、六四一斤	一八二、四八九	一、六〇、五二一斤	九九、七九〇
二、四七、七三三	二、一〇一、四九四圓	—	—	—	—

麥酒の輸出 本品の輸出は清國其他の東洋の各地であつて、最近の總輸出額は一萬八千餘石(四十二年一八、〇二七石)に達し、重に大日本麥酒、麒麟及び加富登麥酒三會社の製品で、其品種はラーゲル麥酒大多數を占め、ピルスナ洋酒、ミュニツク洋酒及びボツクエール、ミュンヘン洋酒等又少數の輸出がある。而して前記三會社の製品中、尤も多量なのは大日本麥酒會社であつて、總輸出額一萬八千餘石中、一萬四千餘石は實に同社製品の占むる處となつてゐる。

葡萄酒釀造業

本邦に於ける葡萄酒釀造業 我が國內の葡萄酒釀造業の目下の情況は、極めて微々たるものであるから。日常の消費額

も大部分は之を海外の各地に仰がねばならぬ。邦内の產品は極めて僅にその需要の一部を充すに過ぎないのである。従つて主産地も産額も微々たるは云ふまでもないが、今主産地に就いて少し。その概要をかいて見やう。

先づ最多の主産地は山梨縣である。その始めは同縣東八代郡祝村の宮崎光太郎といふ人が、斯業の計劃に志して、明治十年佛國へ人を派して其の釀造法を研究せしめたのであつた。而してその後幾多の苦心と改良を経て二十二年始めて純良の葡萄酒が製出される様になつたのである。即ち大黒天印葡萄酒で、其釀造高は一ケ年二千石内外に及んで、その産額は五百萬圓に達してゐる。もう一ケ所あるがそれは即ち甲州葡萄酒と稱するものである。一ケ年に約三千石からの産がある。

現今國産の趨勢

而してその原料葡萄は主として西山梨であつて、外に東山梨と東八代の三郡に主産してゐるのである。その年額は三十餘貫の産出があるのである。次に茨城縣は稻敷郡牛久村の神谷葡萄園で醸造をしてゐる。園主神谷傳兵衛は常に佛國葡萄の醸造の有益なるを認めて、之を我國に移植して醸造を始めやうと思ひ立ち、先づ嗣子傳藏を佛國ポルドー府の某葡萄酒醸造會社に派して、斯業に關しての技術と學理を研究せしめた、而して歸朝後明治三十年十月當村の原野百三十餘町歩を購ひ、直に十三町歩の開墾をして、些に佛國葡萄樹を移植して、同三十四年に至つて初めて同園の果汁を以て赤、白葡萄酒の醸造をした、其後醸造場、貯藏庫等の落成と共に、次第に栽培町歩をも増加して今日に至つたのである。現今同園内葡萄樹

數約五萬本を算し、その製品は邦内各地で販賣せられてゐる。次に新潟縣の葡萄酒は縣下中頸城郡高士村川上善兵衛の所有に係る岩の原葡萄園に醸造せらるゝものである。其創始は明治二十六年で、當初在來の穀倉を利用して葡萄酒五石餘も醸造したのを始めであつた。明治三十一年に初めて石藏を造り百五六十石に増し爾後年々工場及び貯酒大樽、醱酵桶等凡て装置を増設改良して、近時葡萄酒五百石内外を産出するに至つたのである。尙原料葡萄は現在第一園から第七園に至る反別二十一町餘七萬餘株から採收するものである。製品は赤白二種を産し更にボルガンデー、チャムピオン、コンコード、リスリング、ドライアム等の種類がある。附近高田町に於ける日本葡萄酒株式會社及び同東京支店の手を経て各地に販賣

せられてゐる。次に兵庫縣は去る四十三年三原郡堺村に、淡路葡萄酒株式會社の設立があつてから、多少の生産を見るに至つたのである。即ち同社は同地附近に産する原料を醸造するもので、四十三年中職工十四名を使役し一萬二千餘圓を出したのである。北海道では札幌區に於ける札幌葡萄酒合資會社の醸造に係るので、年額約三百石二萬圓内外を産したが、四十三年に於ては僅に八十二石、五千圓弱に減じた。

葡萄酒の輸入 本品の國內に於ける需要は次第に増進して來たので、輸入も従つて増加した。殊に四十四年に於ては著しい増加を示してゐる。

而して輸入品の主なものは、佛國品は「ミンマルソー」「エナウエル」兩會社製、獨逸品は「ハイルブルンネル」會社製、西班牙品

國名	明治四十四年	明治四十三年	明治四十二年
英吉利	三六、二七四	九、〇四五	九、九三五
佛蘭西	四〇、九三九	二四、二六一	二四、〇六一
獨逸	五二、六九四	二二、六二四	三五、六〇七
伊太利	六〇、九八三	三〇、四三一	一九、〇七六
奧、匈牙利	五〇、八五一	三三、二三五	二五、一六六
西班牙	二八、四六五	九五、〇〇一	六七、〇七〇
北米合衆國	一三七、四七	三六、四〇六	二四、八五六

現今國の趨勢

は「ベネ、コラエルレラン」會社製、米國品は「グントラウ」會社製等であつて、輸入及び樽入兩種である。

其輸入額四十二、三年には數量約百六七十萬リットル價額四拾萬圓であつたが、四十四年に於ては約三百二十萬リットル壹百餘萬圓の激増を示してゐる。即ち左表の通りである。

計	其他	計	其他
1,041,017	5,721	4,764,366	5,041
			2,676
			4,388,690

二四二

文房具

文房具にも色々あつて一二錢から數百圓もするものがあるが日本の文房具製造業は簡單なものから、そろそろ發達して來て今では計算器、タイプライター、計算尺、圖引道具等複雑な物の外は大抵少しづつは出来る様になり東京で出来る鉛筆、インキ繪具ペン等は一年二百萬圓以上に上つてゐるが、尙戰爭を機として内地製品が著るしく發達する事であらう。

鉛筆製造業

沿革及生産地

沿革及生産地 我が國の鉛筆製造の最も始めは明治六年頃であつたが、其後同二十五年頃に至つて、東京に工場を創立して製造を開始してから、次第に製造業者を増加し、現に東京市及び其附近を主産地とし、大阪石川等でも産出されて居るが多くは小規模で動力を使用するやうなものは僅に四五ヶ所に過ぎなかつた。目下石墨原料は朝鮮を主として、鹿兒島等より仰ぎ、下等品は既に輸入を防ぎ、漸次良品の製造に従事する程に進歩して來た。

而して其種類は形狀によつて區別すれば六角、丸軸、楕圓形等に大別せられ、又其用途より區別すれば普通、鉛筆及び製圖用、畫學用、懷中用、色鉛筆業である。普通鉛筆の需用が最も多く、内地製品の多くは之に屬して居る。

現今國産の趨勢

二四三

二四四

何んと云つても是れが製造業の一番盛んなものは東京市で現今製造戸數約二十に達してゐる。最も有名なものは、眞崎市川鉛筆株式會社で、新式の機械に依つて、外品に劣らないものを、製出して其の一ヶ年の生産額約十萬グロツス(ツケは四百四十)以上に達してゐる。普通鉛筆を主として、色鉛筆も産出するが其他の工場に於ては専ら普通鉛筆製造に従事してゐるのである。

原料木材は米國ビヤクシン、日本ビヤクシン、アラ、ギラノコ、ホ、ノキ、サワラの六種を用ひる、日本産ビヤクシンは福島、長野、岐阜等の産出である。而して製品の一部は清國其他海外に輸出せられるのである。次いで斯業の盛んなのは大阪府である。

府下の斯業は、岸和田の中村鉛筆株式會社の一つがあるばかりである、同社は明治四十年に創立され、四十三年から資本金拾萬圓の會社組織として、十馬力の發動機二臺を具へて、職工約百名を使役し一日平均二百グロツスを製出したが、近時工場増設の結果一日四五百グロツスを製出されるに至つた。原料里鉛は富山、鹿兒島、朝鮮、及び米、獨等の産品を用ひて、木材は近時米國から輸入されるシダー及び北海道産ホノギを使用して、殊に前者を多く使用する。以上の外石川縣に於ても、金澤市及び、江沼郡に、各一戸の製造者があつて、年額約參四千圓を産し、四十三年に於ては、數量四千五百グロツス價格四千參百五拾圓を算すると云ふ事である。

本邦に於ける鉛筆製造業は前記東京及び大阪の二會社を主として、他の小資本なる個人製造者の産額を合算する時は現今一ヶ年の生産高普通鉛筆三十五萬グロツス、劣等品二十萬グロツス合計五十六萬グロツス内外に達するであらう。

鉛筆の輸入 本邦に於ける鉛筆製造業は漸次進歩の傾きを示めして、現今輸入されてゐるのは、製圖及びコツビー用等比較的用途少き上等品を主として、其他は大部分内地製品を以て代用される機運に向つてゐる。之が原因は内地及び朝鮮に産する善良で而も豊富な黒鉛の利用に依つて唯木鞘の一部のみは、今尙外國品を仰いでゐるが、之亦化學工業の進歩に依つて、木質を自由に變化させる事が出来るから、其設備如何によつて敢て外國品を必要としないでもいゝ。殊に獨逸

がバヴァリアの東部埃國寄りのパウサウ地方に黒鉛を有する者で、木鞘の多くは之を北米に仰ぎつゝあるも、尙バヴァリヤ鉛筆の名稱を以て、世界に覇を稱せるを見れば、我國に於ける斯業又多望である。我國に於ける輸入状態を見るに、其の最普通なるは、小賣二錢乃至三錢の品でHBを中心とする前後、二三種の物最も多く、即ち輸入は左の通である。

輸入會社、

エ、ダブリユー、フエバー社、ジョフアン、フエバー社、ソラー社、シエエス、ステットラー社(以上獨逸)
エバハード、フエバー社、イーグルペンシル社、アメリカンペンシル社、(以上米國其他)。

輸入鉛筆

現今國産の趨勢

ドローイング(參錢)コンマール(參錢)アカデミー(六錢)イー
 琴印(六本貳拾錢)斧印(一打參拾錢)乃自參圓(星印(一打參拾錢
 乃至貳圓)其他、

以上の如く、明治四十四年、七拾七萬六千餘圓の、輸入を
 最高として逐年輸入の減退を示いて來た。

故に此機會を逸せず、内地生産の發展に、更に一大努力を
 加へるやうに成つたら、極めて有効な結果を來す可きは必然
 である。輸入統計は左の通りである。

年 次	數 量	價 額
明 治 十 八 年	二五、七五〇 <small>哥</small>	二三、八〇〇 <small>圓</small>
同 二 十 二 年	九六、〇三九	九四、八〇一
同 二 十 七 年	二四、〇〇四	三三、二六

同 三 十 二 年	七五、六六五	九九、三四四
同 三 十 七 年	一四三、五五二	二四、〇五三
同 四 十 二 年	二八四、八六九	五二〇、八一九
同 四 十 四 年	四五七、四三二	七七六、九〇二
大 正 元 年	二七一、六二二	四七六、四〇四
同 二 年	一九七、二六	三六五、三四

斯くは雖も現在、速記圖畫等特別なものに使用する鉛筆は
 今の所何うしても、外國品を用ひなければならぬが併し一
 般學生や何かに用ふる鉛筆は決して、外國品を使用しなくて
 も十分差支まいから、東京市江商調査會では各學校に對して、
 成るべく外國品を用ひない様にとの目的で、外國品の名を書
 いて、之々の品は避ける様にと云つて遣ると云ふ事である。
 唯困るのは日本品は種類許り多くて、粗惡なまやかし物が澤

山ある事である。

製造業者が各國に責任を以てしたならば輸入の必要を全然感じなくなるであらう。

インキ製造業

有望なインキ製造業 インキの需要は近來激増して來たが、幸ひに其製造業は長足の進歩を爲し、既に内地に於いても中等品は容易に製造し得られる許りでなく輸入の如きも漸次減少して遠からず市場にその姿を見ない様になるに相違なからう。又輸出の途も開けて四十三年度には五萬九千圓、大正二年度には拾貳萬圓を輸出するに至つた。けれども未だ輸入増進の状態にあるは悔るべからざる事實であるから、努めて注

意を要せねばならぬ。之の統計を示して見ると、左の通りである。

年次	輸出		輸入	
	數量	價額	數量	價額
明治三十年	斤	圓	斤	圓
同 三十五年	斤	圓	斤	圓
同 四十年	斤	圓	斤	圓
同 四十二年	斤	圓	斤	圓
大正元年	斤	圓	斤	圓
同 二年	斤	圓	斤	圓

右輸入品中の主なものは、ステフエンインキ、カアヨーインキ、ウォーターマンインキ、等であつて、小賣相場は赤色二〇オンス壹圓五拾錢、十二オンス一圓五錢、六オンス四拾

現今國産の趨勢

二五二

五錢、又黒色は四〇オンス壹圓五拾錢、二十四オンス壹圓五錢、八オンス四拾五錢である。多くは事務用及金ペン用として使用されてゐる。之に對して本邦品としては篠崎チャンピオン、丸善ゼニス、伊藤屋の植物製等がある。一オンスは五錢、二オンス七錢内外であつて逐年生産の増加を示しつつある。丸善では大正二年中五百石のインキを製したと云ふことである。輸出の多くは支那であるが、不思議なのは東京の産額と支那輸出額とを比較すると、支那輸出額の方が多いと云ふことである。輸出は東京に限らないが、之は畢竟するに租税の關係上實産額を秘してあるからであらう。

又最近にはペン先の腐敗に對しても種々研究の歩を進めてゐるのは、斯業の覺醒とも云ふ得べく事務用として賞用せら

るゝのも遠くはあるまい。

ペン先製造業

ペン先 ペン先の如きは雜作もなく出来さうなものだが、明治三十年以來のペン先の輸入統計を示して見ると左の通りである。

年次	年	數	量	價	額
明治三十年	同	同	三四、四三		一七、五二九
同三十五年	同	同	九八、二五五		四八、九七六
同四十年	同	同	二四六、一七六		二五、四九七
大正元年	大正	大正	四〇〇、九七七		一八二、九七六
大正二年	大正	大正	四二四、八三一		一九六、三〇一

現今國産の趨勢

而して漸次増進の傾向があるが、是は製造原料の鋼薄板の生産が皆無な爲めだとは云へ要するに技術に不備の點の多い爲め未だ振興の時期に到達してゐないからでもあらう。

現今に於ける主な輸入品はヒンクス、ブランドー、ギロツト、ベリイミツチエル、スベンセリアンの製品で、其種類はブランドー社一七五號(小賣一哥壹圓七拾錢)ジブランド社東郷(壹圓貳拾五錢)レビユペン(壹圓貳拾五錢)又學校用としてはヒツクス社Gペン(小賣一哥八拾五錢)銀行ペン(九拾八錢)Jペン(八拾五錢)及びスベンセリアン(壹圓貳拾錢)等であつて、本邦品では既に販路を開始せんとする市川、眞崎製品及び古一堂のG、J及銀行ペンのあるに過ぎない。其他東京牛込にペン先製造業者はあるが、鐵でも眞鍮でも到底外國品には遠く及ぶべくも

ない。更に前記の三種と外國品とを比較すると、Gは英國の哥四拾八錢に對し參拾八錢、Jは英の七拾八錢に對し六拾錢又銀行ペンは英の四拾五錢に對し參拾五錢を示して價額低廉で比較的品質と亦普通筆記用としても適するが、唯其體裁に於ては彼に遠く及ばない。金鍍金の如きも其色が稍劣つて見えるのは遺憾である。しかし漸次需用の増加と共に品質の改良を圖つたならば、各種多數の優良な製品を見るに至るものも近き未來であらう。

萬 年 筆

心細い萬年筆 近頃流行して居る萬年筆の輸入は參拾萬圓外に金ペンのみ輸入が十萬圓位ある見込である。東京で出

来る萬年筆は一年一萬ダース約貳拾萬圓に上り段々多くなつて来るけれど軸は皆輸入したものを加工するのだ、近頃護謨を變質させてイボナイドと云ふ物と爲したる後軸を作る事が出来始めたから遠からずゴムだけの輸入で済むであらう。金ペンも此頃製造し始めたから漸く全部日本で拵へられる道理であるけれど、到底安心して使用する程のものでないとは心細い次第である。

釦 製 造 業

由來と現況 釦は近世歐洲人と交通するやうに成つてから、用ひられるやうになつたもので、ボタンと云ふ名稱は、もと葡萄牙語ポントより出た名である。

其歐洲に於ても始めて金屬製釦を用ひたのは、西紀十八世紀の初めであつて、其製造中心地は英國バーミンガム市であつたが、忽ちにして獨、佛等の市場に傳はり、至る所に之れが普及を見るやうに至つた。次で十九世紀の後半に至つて、釦を以て一種の裝飾品となす風が行はれて従て各種各様の釦が盛んに製出せらるゝやうになつて來た。今其の材料は、各種各様金屬製あり陶磁器製あり、其他に硝子製、寶石製あり介殼製、セルロイド製等一々枚舉に遑のない程の有様である。今一般に、需要多き、カフス釦は今日では嗜好を占ふ、參考品として、僅かな輸入をする外は、全く内國品で、需要と満してゐる。カラ止の背ボタンは、精巧な機械がないので、未だ舶來を俟つが之とて一年二年の間には買人の舶來熱を驅

現況

電 氣 工 業

二五八
透する事が出来るし、ピカ／＼物のチョッキ卸も其の通りである。日本特産の貝卸は、昨年貳百萬圓の輸出をして居る。

電 氣 工 業

現況 電氣工業は現今では殆んど獨立に近い。外國製のもるを矢鱈に嬉しがつた時代は、最う過去の事である。

今では、日本製のものを使はう使うとしてゐるばかりでなく實際に是を使つてゐるものが少くはない。

獨逸と國交斷絶した處で、左程の痛痒を減じない程に日本電氣工業界は進歩して居ると、斷言するに憚らない。

驚くべき進歩 電信、電話、電線、乾電池は云ふに及ばず、蓄電池、地下線、電氣機械用の絶縁物と雖も、數年前から着

驚くべき進歩

喜ぶべき風潮

電 氣 工 業

々日本で造つてゐるのだ、それから燈火用のアセチリン瓦斯にする爲めのカーバイトや、窒素肥料、何れも水力電氣によつて製して居る、例の電信柱に用ふる碍子なども特別高壓線に用ふるものでも、今では日本で出来るやうになつた。

夫れから、配電盤用の電氣測定器は日本で大いて造つて居るが、雷氣學上の極めて精密な測定器は獨、英、米あたりから入れてゐる。

喜ぶべき風潮 電氣工學を専門にやつてゐる工科大学の學生が、争ふて實地機械の製造の方面に行きたがるのを見ても、此の間の消息がわからないな。

電氣工業界全般に互つて斯くの如き機運が、此處數年前から既に勃興して居るのは、大いに理由のある事である。日本

現今國産の趨勢

製のものとも雖も、決して歐米のものに比較して見劣りのするものではないと云ふ事が一つの原因で、成るべく日本製のものを使用すれば、正貨が海外に出て行かないから、出来るならば、外國製より日本製を使ひたいと云ふことになつたのも一つの原因だが、此の二つの理由の外に需要者にとつて日本製のものを使つたのが甚だ便利な點がある。夫れは何かと云ふに修繕する時の便利である。日本製であれば、別に手数がかゝらないで、直ぐ修繕が出来るのである。

日本製の器械 普通のモートルは餘程大きいものでも、或は小さいものでも、日本でドン／＼製作して居るが唯電車のモートル丈は、日本で作つてゐない。作れないのではないが、あれは注文によつて色々と型が違ふし、製造する數も割

合に少い處から作つても利益がない爲めに、海外から輸入してゐるのである、これと能く似た状態にあるものは、水力電氣の發電所で用ふる水車である、あれは大きいになると、獨逸、瑞西邊から輸入してゐる。

落下する水の高度と其量によつて水車の大きさも自然違つて來ねばならない爲めに一つ一つ作つては居られないのである。小さいのになると澤山日本で出來てゐる、従つて其の水を引いて、水車に送るあの太い水管、普通水壓管と呼んでゐるが、あの水管も特別なものになると外國から輸入してゐるが一般のものは日本で製作してゐる。

今暫くて獨立 水力電氣でなくて火力を以てする發電所用の大きい蒸氣機關、ダービン汽罐などは外國から輸入して來

額は大きな者である、併し小さい、吸入瓦斯機關などは勿論日本で出来るが、大きな「瓦斯エンジン」になると今云つた通り海外から這入つて来る。獨逸なり、米國なりから来るのであるが、何れも獨逸と限つて居らぬから、獨逸から來なければ、英國でも米國でも、何處でも入れられるのである、右の通り現今の日本電氣工業界は殆んど獨立したと云つて可い位まで進歩してゐるのである。

完全に獨立するのは今暫時の後であらうと信ずる。

花 蔴 事 業

由來 蔴蔴、莫蔴類は、疊表又は敷物として一般家庭に盛んに使用せられてゐるもので至る所殆んど其の生産のない國は

ない。其原料は燈心草料の蔴と莎草料の七島蔴、苧苧との二種である、其性質に依つて前者は多く疊表とし、又後者は下等の疊表荷物の包装用として廣く需要されて居る。

花蔴は彩色した蔴草を以て種々の意匠によつて、織り出す物である。日本の蔴蔴を考案改良して造り出したものである。

其織方によつて、區別すると普通の花蔴、綾蔴、錦蔴等の種類がある。中で綾蔴と云ふのは長い蔴で、表裏同様の模様を織り出したもので、經絲は綿絲、草は「アニリン」色素で染めだしたものである。又綿花蔴は、細い蔴を用ひて、これを打ち柔げて、各種の模様を織り出したものである。

一般花蔴の良否は蔴草の優劣と、意匠の巧拙と、織方の精粗等によるものである。

二六四
我國より輸出する花菴の主な産地は岡山縣である、一ヶ年の輸出額は凡そ參百餘圓を出し、其他廣島の參拾九萬圓、福岡の參拾五萬圓等に次いでゐる、静岡の六萬五千圓、石川の參萬六千圓、兵庫の貳萬五千圓等が亦之に次いで居る。

花菴の輸出 輸出花菴製造の始めは、明治九年岡山縣人、磯崎眠龜と云ふ人がセイロン産の蘭蓆に依つて、之の改良に苦心し同十一年に至つて、始めて錦莞菴を織り出したものである。眠龜は天保五年に備中國都窪郡茶屋町に生れた人である。紡績綿絲を改良したりして効があつたが、明治九年に至つて三備地方の新産物花菴製造の改良を企畫し、遂に明治十一年に、一新機械を發明した。織方を改良して、又大に聲價を内外に輝し、專賣の特許を得るに至つたのである。

斯くして重要輸出品の一たるに至つたのである。

各主産地の状況 三種類中疊表類は、大分縣を第一として、廣島が之に次ぎ、其他岡山、静岡、熊本、石川、島根の諸縣は劣りなく何れも最近年額拾萬餘圓を産してゐる。莫産類は廣島縣を主として、石川、福岡が之に次いでゐる。莞菴は岡山縣が全額の大部分を産し、其他福岡、廣島等を主産地とする先づ其内で、岡山縣の斯業の産額は常に第一にあつて、殊に莞菴類の如きは、全國總産額の約八割を占めてゐる。

疊表類は、都窪、御津の兩郡を主産地として、何れも備後表に屬するものである、引通、長髭、中髭、小髭及び小中表等の種々別があつて、其産額は最近數年間に、平均二百三四十萬枚、八拾參四萬圓を示めして、其多くは東京及び、關西

各地に販出せられてゐる。

莫産類は其年額は僅かに壹萬餘圓で、主として都窪、小田後月の諸郡に製産されてゐる。廣島縣は全國第二の製産地である。其の中疊表類の産額が其大部分を占めてゐる。主産地は沼隈及御調の兩郡で、沼隈郡は天文の頃同郡山南村の水田に蘭草を栽培して引通表を製織したのに始つたものである。

當時は長蘭ばかりをゑらび、短蘭は全く使用しなかつたが、其後山南村の住人十郎左衛門と云ふ人短蘭を以てする製織法を案出して、又蘭頭を交叉して中指表を製織した。時の領主が中指表を見て大いに之を賞賛して賞銀を下賜された事があつた。爾來藩廳に於て保護奨勵に努めたから、名聲が全國に喧傳するに至つたのである。維新後廢藩と共に一時衰頽しや

うとしたが暫くにして、聲價を之に復して今日に及んだのである。製造は殆んど農家の副業とされてゐる。各種の製品は廣く諸府縣に販出されるけれども、殊に東京大阪を主なものとしてゐる。大分縣は疊表類が常に、全國第一に位して、最近の産出額は實に百五六拾萬圓を算するやうになつた。

其製品は殆んど、全部七島蘭より製した七島表(又は琉球表)で其他の製品は數ふるに足りない有様である。之が製作の中心地は東國東郡で速見、大分の二郡が之に次ぎ、地品の出向き先は大阪を主として、東京、中國、四國、九州地方其他本土の各地で、一部は滿鮮地方に輸出せられる外専ら實用向として賞用されてゐる。福岡縣産出の主なものとしては、輸出向莞莖がある。岡山縣に次いで全國第二に位して、年を逐ふ

て益々盛況に向ひつゝある。主な製産地は三瀨、八女、山門の三郡で、殊に三瀨郡が其過半を産すると云ふ事である。壘表類は琉球表を主として三瀨郡に主に産するものでは八女、築上二郡が之に次ぎ、莫産類も亦同じく三瀨に主産し八女郡之に次いでゐる。其製作は多くは農家の副業に屬して製品は縣外各地に販賣せられて居る。静岡縣斯業の生産は琉球表を主として、莫産、莞蔴亦多少の産出がある。琉球表の起原は、近藤縫之助と云ふ人、種苗を豊後の國府内の城主平某に請ひ、之を居邑氣賀村に移植したのに始て居た。現今に於ては、引佐郡南部及び濱名郡の西部諸町村の特産物となつた。遠州表の名が廣く世に傳はつて來た。備後表は其起原詳かでないが引佐郡濱名村、大谷高栖寺境内の地邊に生じた燈

心草を採收して、之を敷物に織り上げたのを嚙矢とする後水田に移植して漸次之が、栽培製造を改良して、現今では遂に濱名表の名を以て縣下の一物製になつてしまつた。近時引佐郡氣賀、濱名郡濱松地方に、同業組合を設け益々改良發達を謀りつゝあると云ふ事である。

原料は殆んど縣下の産出のものを用ひ、稀には他地方に仰ぐ事もある。製品は主として、東海地方各地及び、長野、出梨等に販出せられる。石川縣に於ては其製産額も微々たるものであつたが、去る三十七八年頃から、蘭栽培區域の擴張されると共に、著しく發達して來た。製品は壘表を主として、莫産類之に次ぎ、一時莞蔴の如きは、年額能く拾餘萬圓を産したが、近時は商況不振の爲め製造業者中には年々内地向製品

に轉業するものが多くなつて、黄旦の盛況を見る事が出来なくなつた。

二七〇

主産地は能美郡で、こゝが全額の約八割を占めて居る。熊本縣の本業の生産地は八代郡である。全額の八割内外を占めて其の他飽託郡、熊本市が之れに次いでゐる。製品を疊表類が大部分を占めて居る。市内監獄に於て製産せられる外、主として農家の副業に屬し何れも規模の小さい屋内工業である。從來其品質良好でなかつたけれども、近年原料及び製織機に種々の改良を加へた結果、次第に盛況を見るやうになつた。

以上は本業の主産地として、明治四十三年中全國總産額壹千萬圓中約八百七拾萬圓即ち八割六分内外は實に是等諸縣の製産に係るのである。而して上記の外、稍々重なる産地も十

縣程ある。それは何れも少數なる産額であるから此處へは上げない事にする。

莞薙類の輸出、上記三品中莞薙類は、主として海外に輸出されるもので、其多くは連製に屬し單製は全額の約四分の一に過ぎない。即ち左の表に依つて主なる輸出地方を列舉して置く。

國 名	明治四十四年	明治四十三年	明治四十二年
清 國	四九、六九五	四四、三八九	一七、〇一七
英 吉 利 國	一八五、二〇五	一三二、九四二	七、七二〇
獨 逸	四六、八八九	五六、二九二	五、一五五
北 米 合 衆 國	二、九四、五五六	三、二七、二七九	四、〇九、〇八七
英 領 亞 米 利 加	一一九、六七〇	一二六、四三五	一一五、七三〇

現今國産の趨勢

二七一

濠太刺利	八七、九九一
其計	三、七四六、四三四
七四、九四四	三、九三七、二七六
八四、四九三	四、六〇一、〇一四

二七二

麥稈及經木眞田事業

沿革 起原地は、東京府下荏原郡大森村である。今から凡二百年前、某が麥稈を以て箱細工に貼付したものがそものある其の後麥稈で種々な玩具を製して附近の需要に應じたものだったが明治七年頃初めて横濱に在留の米國人「モリス」なるものが大森の麥稈業者に勧めて眞田を作らせて、これを米國に送つて幸に、多くの注文を受けたが、其の漂白法が不完全だったから、一時聲價を落してしまつた。其の後亞硫酸瓦

斯の漂白法を行ふやうになつた更に十六年頃からは從來の編み方の六本平打の外五本菱打、片菱打五本角立、長角立、十本打等を作つて出して、技術の進歩と共に、大いに其製産を増加して、爾來各府縣に本業を傳ふるに至つたから、今日のやうな盛況に達したのである。

經木眞田も同じく大森附近に始まりたるものである。明治二十四年同地川田谷五郎と云ふものが、檜材を原料としてこれを髣造をしたのに始められてゐる。

明治三十年頃から次第に製産地を擴めて、小田原の須賀、千葉の松戸等を始めとして、上總其他で製するやうになつた。そして更に近年に至つては、麥稈と同じく大に其の製産地を増加して來た。岡山、廣島、其他の諸縣に於ては麥稈經木混

現今國産の趨勢

二七三

交眞田の新製品を出して、益々本業を盛んに進歩させるに至つたのである。

經木原料は、從來「ドロ」「イモノキ」「トドマツ」「エゾマツ」「ヒノキ」「ホノキ」「ヒバ」「タモ」「ハノキリ」「ケヤキ」「シナノキ」等の如きものが一般に使用されてゐたが、現今盛に使用されてゐるものは、關東地方で「ドロ」及び「イモノキ」の二種は産額の殆ど全部を占めてゐる。兩方共に岩手を主として青森、秋田、山形、宮城、福島等、東北諸縣及び北海道産を用ひ、關西地方にては主として、「シロキ」及び「オニシロキ」を用ひ、中國諸縣高知、香川、愛知、岐阜縣等に産出せられてゐる。

要するに經木材は材色純白で永く變色する事がなくて纖維強靱で光澤の強いものを尙ぶのである。前記の三四種は最と

能く此條件に適するものなのである。唯例外として黄褐色經木を要する時は、「トドマツ」「エゾマツ」等を使用するに過ぎない、眞田製品の種類を大別すれば、普通品と、變り打の二種がある、七角五角及三平の如きものが之である。種々の細工物で例へば經木ばかりで意匠を凝らしたものの、又は麥稈と混成し染色經木と混成し經木縮と混成したものもある。

主産地の状況 眞田類の全産額は、最近に於ては其大部分は常に海外各地に輸出せられてゐる。其主産麥は麥稈眞田に於ては、岡山、香川、の二縣遙かに池縣を凌いでゐる。愛知愛媛、山口等を主として經木眞田は岡山が第一である。埼玉香川、廣島、山口、神奈川の諸縣が之に次ぎ、麥稈經木交眞田は其の過半は岡山縣に産する、岡山縣は本邦に於ける第一

の製産額を有ししゐる、其の製産額は實に全國の産出額の殆んど四割は、本縣の産出である。

斯く盛大になつて來たのは明治四十二年からであつた初めは明治十七年に上房郡長が麥稈眞田の有望である事を聞いて、有志者を募つて工場を高梁所に設く、其後今日に至るやうに隆盛になるに至つたのである。

縣下の内其の産額の最も多いのは、淺口郡であらう。年額約百萬圓に達する。小田、後月、吉備、上房、川上の諸郡が之に次いでゐる。製品の六部分は、神戸商人の手を経て海外へ輸出されてゐる。其作業は大いては、工場組織のものが少く、殆んど農家の婦女子の副業として製品の中内地向は製帽工場又は地方問屋が直接取引をしてゐる。原料は經木は廣

島から仰ぎ、麥稈眞田は縣下で盛に栽培される。香川縣は岡山縣に次ぐ産額を有する。其起原は明治十五年頃で始めは製造法を知らないために多くは、麥稈のまゝ販賣してゐたが、明治三十一年頃には眞田として盛に重要輸出品となつて來た。其の頃は僅かに、拾壹萬餘圓の産出に過ぎなかつたが、爾來日に月に増々盛になつて、全縣下何れも多少の産出のないところははない。其の中でも主な庭は、香川、大川、三豊、綾歌仲多度、の各郡である。

本縣の地勢は南から北へと傾斜してゐるから、乾燥しやすく、又地質が花崗岩壞土から成つてゐるので夏も製作に適してゐる。其の稈稈が自然の光澤があつて市場でも好評を博されて、需要が益々増進して行く。僅の經木眞田を除いて外

二七八
 は大部麥稈眞田で二三の小工場を別としては、こゝも農家の副業とされてゐる。廣島縣の主産地は、深安、賀茂、安藝、比婆等の諸郡である。麥稈眞田の産額が全産額の半數を占めて他は、經木、其の交眞田で、農家の婦女の副業とされてゐる。始めは原料を世話人に渡し、世話人が編製して之を纏めて問屋に出す事になつてゐる。埼玉縣は殆んど經木眞田ばかりで、今では名ある産地として知られてゐる。従來は原料として白楊を主に使用して來たが、今では「イモノキ」の使用が最も多い。南埼玉では粕壁町が中心として、其外は、北葛飾、北足立等の諸郡にも多少は産出されてゐる。山口縣は明治三十五年に漸く始めて、麥稈眞田業が開始せられたので縣の當局者も骨を折つて之が發展に務めてゐるから、次第に隆盛に

成つて行つた。製品は經木眞田が其の大部分で、原料は縣下の外廣島縣の製を用ひて居る。愛知縣の本業の始めは、明治十六年頗であつた。一時大いて盛況に成つて來たが近頃、年々に衰退の兆を呈して來た。原料麥稈は縣内産を用ひ、經木原料は東北地方岡山長野の兩縣から仰いでゐる。神奈川縣に於ては、殆んど全部檜樹郡の製である。其の製品は全部經木眞田が嘗ては年額拾萬餘圓に達する程の盛況であつたが近頃又衰退に向つて來た。眞田業の起原としてゐる東京は迅時又著しく衰退して來た。

眞田類の輸出 本品は其の製品の大部分は海外に輸出されるので、年額は約七八百萬圓はある。最近の貿易狀況は左の通りである。

左は麥稈、經木を合したもので全輸出額中七割は麥稈眞田である。

國別	明治四十四年	明治四十三年	明治四十二年
英吉利	一九四七、七八 <small>圓</small>	二四七、五七七 <small>圓</small>	二、三三、〇三五 <small>圓</small>
佛蘭西	一、〇七一、六七二	一、六六、三八八	六七九、一六四
獨逸	一、一三七、三九五	一、六三九、二二六	一、三九二、六八一
伊太利	一、一五、八二〇	一、二三、九四九	一、二七、九六七
北米合衆國	一、七七七、九七〇	一、二七八、五三七	一、六七七、六五〇
濠太刺利	二〇五、八三二	二二九、〇六六	一、六二、六三九
其他	—	—	—
合計	六、三九五、〇六八	九、〇九五、五二二	六、三五四、一六六

本品は元伊太利の特製品だつたのが、我國で製出するやうになつてから其技術も伊太利の及ばざる處で、又價格も我國

のものは低廉であるから、益々海外への要需が増加するばかりである。其他、マッチ箱用として、輸出される經木は又左の通りである。

種類	明治四十四年	明治四十三年	明治四十二年
マッチ箱用	一、一七、〇〇六 <small>圓</small>	一、一〇、七七六 <small>圓</small>	一、四三、六〇一 <small>圓</small>
經木	四、八、八三	三、七、〇二	四、一、四〇三

製藥事業

種類及び生産地 各種の工業が発達するに伴つて、使用する諸種の藥品類も次第に産額を増加して來た。今では全國の

現今國産の趨勢

製造戸數二百餘である。

其種類を上げれば硫酸、鹽酸、硝酸、硫酸曹達、炭酸曹達、苛性曹達、沃度、沃度加里、鹽化加里、明礬、硫酸、アンモニア、醋酸石灰、晒粉等で、殊に硫酸及び晒粉を主として、苛性曹達、沃度、沃度加里、硝酸等が之に次いでゐる。其の主産地は大阪、東京の二府を第一として他は山口、兵庫、新潟、北海道、和歌山、茨城等の諸縣を主なる所として數へる事が出来る。大阪府は全國第一の生産地で、其の産額は實に全國産額三分の一を占めてゐる。大阪市西區西九條大阪晒粉株式會社、同市西區湊屋町大阪アルカリ株式會社、西成郡千船村日本硫酸桑式會社、堺市硫酸晒粉株式會社等は、其主なる工場で、製品は晒粉、硫酸沃度加里硝酸等を主として、大

抵大阪市の産額に依らなければならぬ。東京府下に有る製造工場は、北豊島郡王子村關東酸曹株式會社を始め、東京市内其他に於て現今十數所製造業者がある。主な其製造品は硫酸、沃度加里、硫酸アンモニア及び晒粉、其他各種の藥品で、南葛飾、北豊島の二郡及び、東京市を主産地としてゐる。山口縣の斯業の製造工場は、日本舍密製造株式會社の一工場があるばかりである。

同社は明治二十二年の設立されたもので、其の拂込資本は、七拾餘萬圓で、里女職工の數は約四百餘名程ある今盛に之が製造に従事して居る。製品は硫酸、苛性曹達、晒粉等である。其製品は内地各方面に、需用に供する外、一部は、三井物産會社の手を経て海外に輸出されてゐる。兵庫縣の工業用藥品

二八四

は、硫酸、炭酸曹達明礬の三種で、硫酸は全部加古群に産出されてゐる。明礬は飾磨郡の産出で、炭酸曹達の神戸市の生産である。現今縣下製造戸數は五つ程であるが殊に飾磨郡町合資會社淺田明礬製造で最も有名である。新潟縣の斯業の主産地は新潟市である。其の大部分は同市關屋にある新潟硫酸株式會社の生産に係るものである。同社は去る三十年に創立せられ、専ら硫酸の製造に従事してゐる。其他尙長岡市一の製造所があるが、産額にあまり著るしくはない。北海道の生産品は沃度が大部分で、實に本邦全産額の約二分の一を占めてゐる。其他、鹽化加里、醋酸石灰、炭酸曹達等、僅少の産である。沃度の主産地は釧路の厚岸、根室花咲の二ヶ所で多くは副業生産とされて居る。和歌山縣は其大部分、海草郡

に産出する。和歌山市が之に次いでゐる、製品は殆んど全部晒粉で、縣下産出の綿ネル、其他の晒料に使用されるものが多い。

尙以上の外稍々主なる産地を表に示せば左の通りである。

府 縣	産 額	主 製 品	主 産 郡 市
干 華	八四、五、六四	沃 度	兒島郡小串村日本製銅
岡 山	四七、六、三	硫 酸	硫酸肥料株式會社の産
三 重	四、五、九、七四	沃 度	出に係る全部志摩郡に
神 奈 川	四、九、五、〇	沃 度	産す

工業用藥品の輸出 多しと雖も稍著しきものを挙げれば、輸出には硫酸及び沃度加里がある。

輸入品の主なるものは苛性曹達、曹達灰、タロム酸加里、

現今國産の趨勢

赤燐、黄燐、グリヤリン等の種類である。是等は來一部は醫藥に供することがあるけれども、其大部分は素から工業用として輸入するものである。即ち左の通りである。

品名		輸 出	
國 名	明 治 四 十 四 年	同 四 十 三 年	同 四 十 二 年
清 國	84,226	15,339	6,562
香 港	—	—	18,604
其 他	—	—	—
合 計	60,680	11,774	25,166
英 國	15,228	13,606	86,556
獨 逸	46,740	11,899	10,901
濠 太 刺 利	14,785	11,779	2,975
其 他	—	—	—
合 計	245,232	247,095	145,221
沃 度 加 里	—	—	—
硫 酸	—	—	—

輸 入

品名		輸 入	
國 名	明 治 四 十 四 年	同 四 十 三 年	同 四 十 二 年
英 吉 利	259,048	301,754	295,484
佛 蘭 西	101,493	173,705	187,291
獨 逸	215,759	65,246	153,811
其 他	—	—	—
合 計	566,300	544,704	636,586
赤 燐 及 黄 燐	—	—	—
苛 性 曹 達	115,152	136,680	130,487
英 吉 利	2,760	8,764	2,670
獨 逸	6,070	1,090	1,614
其 他	116,982	136,686	130,911
合 計	128,002	146,620	134,705
曹 達 灰	115,067	100,589	96,649
英 吉 利	76	532	182
其 他	114,991	99,997	96,467
合 計	115,043	101,121	96,831

現 今 國 産 の 趨 勢

製薬事業

鹽酸加里					グリセリン				
英吉利	佛蘭西	獨逸	瑞西	其他	英吉利	獨逸	和蘭	北米合衆國	其他
三九,四三三	三三,六一五	二四九,六六八	二五七,四七三	一,一四〇,一五〇	五四,七四九	八七,〇一四	一八三,〇〇七		八六,一九五
四四,二五五	三四〇,六〇六	二二,八五九	一九,四五二	一,一八九,二〇五	二九,九五八	七,三九九	一一,二七四	三五,五八二	四一六,二八四
五四,五五三	五七,一一一	一七八,九九九	二二,〇一七	一,四三七,三三五	一三,八九五	二五,九五四	二,七七七	三〇,二二七	二九〇,二九六

二八八

輸出入薬品の用途 輸出品中の硫酸は、内地各肥料會社の製品の、清國では銀の精煉火薬製造用としてゐる。其他はラ

賣藥業

ムネ製造用に供せられてゐる、沃度加里は醫藥用及びアニクリン色素製造用とせられてゐるとのが多い。

輸入品中の苛性曹達は主に、製紙用、晒用とし、曹達灰は硝子製造に又洗濯曹達製造用製紙用として、殆んど需要の全部を外品に仰いで居る。

鹽酸加里は主として、輸出燐寸の製造原料に供せられ、赤燐及黄燐も同じく其製造原料として輸入せられて居る。

賣藥業

賣藥 その種類は極めて多いが、全国各地を通じて一番斯業に有名なのは富山縣である。

賣藥業としての富山縣は古來から随分有名なものであつた。

現今國産の趨勢

二八九

二九〇
 舊藩時代からもう國內には誰知ぬものはない有様であつた。従つて全国各地にその行商人の行かない所はない位であつた。而して最も賣藥としての最初のものは、即ち反魂丹であつた。反魂丹は富山藩主の前田正甫の時に、岡山藩の醫師萬代淨閑といふ人から傳受されたものである。今同縣に傳へられてゐる由來を少し述べて見やう。

時は元祿三年、正甫が參觀して江戸城中にあつた。偶々一諸侯俄に病を發して苦悶し始めた。處で正甫は即ち反魂丹を出して服用せしめると、忽ち快復して了つた。列座の諸侯は皆な驚いた。そして各其封内に行商せしめんことを請ふた。茲で正甫は松井源右衛門に命じてその製藥を爲さしめた。そして全國に行商を出さしめたのである。之が富山賣藥を全國

に普及し始めた動氣である。斯うして逐年盛大に趣き、利益も頗る多かつたので、藩廳は之に賦課して明和中特に反魂丹役所を設けた。そして奉行以下の吏員を置いて之を掌らしめた。降つて弘化年間には其收稅額參千五百兩の多きに達したのである。爾後維新の際に至るまで大差はなかつたといふ事である。

賣藥行商は初めは富山市以外には出てゐなかつたが、漸次高岡、滑川、水橋等の各地から之を出すに至つた。維新後舊藩士の業を求めたものゝ多くは之に就いた。賣藥業の旺盛なる事前後に比なきに至つた。即ち十五年の調査に依ると、同年中の製藥價格約六百七拾貳萬圓、行商人九千七百人に達したといふことである。けれども同年末賣藥印紙稅規則の發布

と共に、斯業は大なる打撃を蒙り、同十六七年には製薬價額僅に六拾萬乃至八拾萬圓に減じて衰頹の極に達した。越えて十九年賣薬印紙交換規則及び賣薬取締規則の發布せらるゝに及んで稍々其勢力は恢復した。爾後次第に盛運に向つて、今は賣薬業者一萬餘人に達した。其の賣上高は參四萬圓に及び内地供給の外、進んで滿洲、朝鮮、南清其他海外に販路を擴張するに至つた。

次に滋賀縣の統計に據ると既に三十四五年頃貳拾參四萬圓を産出してゐる、以來年々に盛大になつて最近では年々六七拾萬圓の多額を産出するに至つた。而して現今之の主産地は甲賀郡である。蒲生郡之に次ぎ、其他愛知、犬上、阪田、東淺井の諸郡何れの多少の生産がある。四十四年末の製造戸數三

百、職工約四百五十名を算し、近江賣薬、近江製劑、湖東賣薬等の三會社の産出は其多くを占めてゐる。種類は丸薬類が主なものである。そして散薬と練薬が之に次ぐ、多くは專業に屬し一部農家の兼營に係る販賣上の習慣は、前記富山縣に類似してゐる。行商人は全國各地に派してあるが凡てを取引してゐる。

次に大阪市の産出は、極めて盛大なものである。同市最近の統計によると、市内製造工場二百餘、職工約六百四十名に達し、市内東區道修町岩井松之助、同區伏見町大日本製薬株式會社、南區難波高盛大堂、同區心齋橋通森下博薬房等は有名なる製産者である。何れも創業して日は淺いが、殊に森下博薬房の仁丹などは近時の發賣品ではあるが、廣く内外に需要

賣 藥 業

せられて其産額は年々に多額を占めてゐる。
 次に東京は府下に於ては近頃東京市内京橋區南傳馬町星製藥株式會社、神田區錦町應用製藥株式會社、牛込區津久戸町模範賞藥株式會社、神田區鍋町大木合名會社、等の賣藥製造會社がある。其他個人としても下谷區池の端仲町守田寶丹、日本橋區元大工町高木與兵衛、日本橋區通四丁目津村順天堂、日本橋區吳服町太田信義、京橋區大鋸町喜谷市郎右衛門、神田區花房町山崎帝國堂、日本橋區馬喰町山崎愛國堂、日本橋區橋町丸見屋商店等著名なる賣藥業者が頗る多い。従つて其産額も著しいものである。

上記各府縣産出品の輸出せらるゝものゝ販路は主に、朝鮮滿洲、清國各地及び南洋諸島で、彼地に於ける本邦人の外に

清國人及南洋土人間に其需要が頗る多い。即ち最近の輸出額を擧げると左の通りである。

明治四十四年	同	四十三年	同	四十二年
七三、八〇圓		六七、一七圓		五三、三二圓

石炭酸業及びサリチル酸

主なる用途 主なる用途は防疫及びピクリン酸黄色火藥原料(サリチル酸の原料である)。

防疫用としては、近年硼酸、昇工水等の却つて優秀である事を認められて、石炭酸の消費額は年々減退するばかりだが、ピクリン酸に至つては、軍備の擴張軍器の改良進歩に伴つて

現今國所の趨勢

主なる用途

石炭酸業及サリチル酸

酸ルチリサび及業酸炭石

二九六

各國共黄色火薬の需要が著るしく増加して来た。我國も亦火薬原料としての需要が逐年増加して来て、防疫用としての消費減退以上に達してゐる。

サリチル酸は我國で製造するものはなく、皆輸入を仰いでゐる。

輸入の統計 斯く衛生上又は軍事上欠くべからざる、石炭酸の我國に於ての額は、遺憾ながら、零である。斯く國家急變の場合に重要物件たる石炭酸は、全部是を海外に仰がなければならぬのである。

其の供給國及び數量は左の通りである。

▲最近五ヶ年輸入表

年次	數	量	金額
明治四十二年		六〇、八三斤	一六、四〇九
同 四十四年		八四、一〇四	一九、五六八
同 四十四年		六五、六五三	一九、〇〇九
大正元年		七六、九三六	二七、〇〇八
同 二年		七三、八〇八	二五、四六二
平均		七四、八六六	二〇、九〇七

即ち年々七十餘萬斤貳拾餘萬圓の輸入をなしつつある。而して此の輸入國別を調査すると。

▲石炭酸輸入國別

區別	明治四十三年同	四十四年同	大正元年	平均
獨逸	五四、三二斤	三三、〇〇〇斤	三〇、〇五九斤	三八、七二三斤

現今國産の趨勢

酸ルチリサび及業酸炭石

石炭酸業及サリチル酸

英 國	一六二,四三二	一八八,五〇〇	一三〇,六四四	一六〇,五八
佛 國	—	—	一〇一,六〇一	一〇一,六〇一
和 蘭	八四,六八	五〇,八〇三	一六四,〇九〇	九八,八四〇
瑞 西	二五,四〇〇	—	三〇,四八二	二七,九四二
白 耳 義	三二,三六	四六,三四三	三三,九五二	三七,二〇八

二九八

戦争の影響 前表に示す通り、我が石炭酸は全部歐洲の供給に依るので、而も其大部分は獨逸から輸入して居たのに、今回の戦争に依つて、輸入の全然杜絶したばかりではなく、我國も亦開戦した爲め石炭酸の需要増加を見越して、思惑するものがあつた、去る八月中の如きは忽ちにして五倍六倍の高價を示したのも遇然ではない。

幸に我軍用品は、緩急相應するに足る貯藏品があつたのと、

石炭酸業及サリチル酸

民間防疫用としては需要が次第に減退したのと、市場に在荷豊富であつた爲め、市價は漸次緩和して來た、それでも尙且平素の三倍の高値である。

サリチル酸 尙茲に附記して置かなければならないのは、石炭酸を原料とするサリチル酸の缺乏である。

サリチル酸の主なる用途は、日本酒の防腐に缺く可からざるものであるから、其の消費は毎年十二月から四五月頃、酒造家の所謂火入時であるので、此消費期以外には市場に在荷が極めて尠ないのである。

而かも今回の戦亂は、市中在荷缺乏の際に發し、今消費期に入つても、少しも輸入の道がなく、從來よりも五六倍の價格を唱へ、而も愈々消費期に至つたら那邊まで昂騰するかも

現今國産の趨勢

二九九

計り難き強硬なる商状を示してゐる。

▲サリチル酸輸入國別

國別	明治四十三年同	四十四年大	正元年	平均
獨逸	二八、三六斤	三三、〇九斤	一四、三四斤	二七、五五斤
英國	五、〇八〇	—	三、七八三	四、四〇二
佛蘭西	二〇、三五五	三、三六七	一七、七七九	一三、八三三
和蘭	—	一、二三五	八四七	一、〇三六
瑞典	三七八	二、三六九	四、三三二	六、九七六

酒造家はサリチル酸の不足の場合に備へんために、目下是れが代用品として、硼酸フォルマリン等を試用して居るが、其の成績は俄に知る事は出来ない。

故に寧ろ此機會を利用して、日本酒に衛生上有害なるサリ

チル酸の混入を禁じて、曾て經驗された醇素の如き日本産防腐劑の無害品を用ひるやうにしなければなるまい、兎に角サリチル酸の輸入杜絶に依り、日本酒醸造界は多大の打撃を蒙つたのである。

石炭酸と云ひ、サリチル酸と云ひ、其輸入額は、我貿易上左程重大な問題ではないとは云ふものゝ、其用途から研究する時は、一日も等閑に附す事が出来ない。

殊に軍備の中樞たる、火薬の原料としての石炭酸を全部海外に仰ぐが如きは、實に由々敷大問題で、もし自給の途があれば、多少の不經濟不引合は云爲すべき場合ではないのである。

自給の方法

現今國産の趨勢

幸ひに近年我國瓦斯事業が發達して來たから、

若し全國の瓦斯副生物たるコールタール及び瓦斯液を乾溜する時は約二百噸の石炭酸品を得べく、それを以て優に我國軍事上の需要を充たし得られるだらうと云はれて居る、而も其事業は、單に石炭酸を抽出製造するばかりではない、トルオール、クレグール、アンストラセン、ピツチ等の他の有用なる工業藥品乃至染料の原料を製造する事が出来る、此點から見ても、コールタールの蒸溜事業の發達獎勵は實に急務と云はなければなるまい。

三〇二

金 屬 器 類

金屬器類 金屬器類は我國では大昔から、各地に製出されたものである、世の中が層一層と文明に向ふにつれて、之も

亦種々の進歩を示して、又需要も廣く其の技術も複雑精巧になつて來た。其の種類は極めて多いけれども、先づ主なものでは、銅器、青銅器、鐵器類である。

現今各地に廣く販賣してゐる日用の銅器の中で、茶褐色を帯びたものは、皆富山縣から産出されたものである。

富山縣は本邦の第一の銅器製産地で古來より有名な所で高岡銅器等と稱されてゐるものもこの地の産である現今其産額は百萬圓以上の巨額に達して、益々海外へ輸出の販路を擴張してゐる。

鐵器の主産地としては、先づ新潟縣を第一としなければならぬ。鋏、鋸、小刀、鎌、庖丁、鉋、火箸、毛拔其の外農具類等を多く製出してゐる。

現今國産の趨勢

三〇三

類 詰 罐

之等鐵器に併せて銅器も共に産出し、現今では全額實に七八十萬圓を産してゐる。銅器類では美術的なものが多く産出される。

其他、三重、岐阜、大阪、京都、兵庫、長野、東京、埼玉、山形、廣島、福岡、佐賀等の諸府縣に、各々其の特色ある産出がある。

罐 詰 類

罐詰類 罐詰は近來著るしく需要が盛んになつて來た。食品を貯藏する事が出來て、殊に携帯にも便利であるから、旅行用又は戦時の軍隊用として最も大切なものである。従つて我國でも廣く到る所で之を製造するやうになつて、

類 詰 罐

今では全國各府縣でこの生産のない所は殆んどない、其中でも一番多く産出するのは廣島縣であらう。其の北海道、東京、京都、大分、長野、愛媛、宮城、京都、福岡、三重の各府縣が、主な産地であつて最近の年額は何れも拾萬圓以上に及んでゐる。

製品の種類は、牛肉、果實、魚介類である。

これ等の罐詰業は、各地共、戦時に盛んに開始したもので日清、日露の役の軍需品として、當時非常な勢を以て製造されたが、それが終ると共に著しく衰へたものも少くはなかつた。今回の日獨交戦に際しても、多少の増加を見るに至つた。廣島縣の斯業が日本第一となつたのも、日清、日露の役からであつた。殊に日露の役の當時は其の全額實に貳百萬圓以

上になつたが、戦争の終局と共に一時、非常に衰へてしまつた、近頃になつて漸く、海外輸出が盛に増加して來たから、又殆んどより以上に多く産額を見るやうになつた。

魚介類、其他の水産物が豊かな北海道は又罐詰の産地として最も適當な土地と云はなければなるまい、タラバ蟹の罐詰の如きは、米國に向つて著るしく年々輸出を増加してゐる。

果物の罐詰類は、どうしても長野縣であらう。

其の豊富な果物は、各種類共生のまゝ、産出しても未だ餘りある程であるから、従つて罐詰にも種々美味なものが製出されて、大阪東京等に盛に、販出されてゐる。

罐詰として、多く我國人に歎ばれる海苔の類は東京の府下在原郡に多く産出されてゐる、其外、筍類等は京都に産出さ

罐詰類

れる。魚介、果物等、數へるに假なき程に各地に産出せられるが多くは僅少で、此處へは擧げない事にする。

時計類

時計 我國で時計を製造するやうになつてから、其の主産地としては、東京、大阪、と愛知縣である。殊に愛知縣は二府より多く、我國中第一の地位を有するのである。

愛知は、明治十八年頃始めて、之が製造を開始して、爾來斯業は日に月に發達して、清國等へ盛んに輸出される。

掛け時計の原料木材は、北海道、東北地方の産を用ひて、「スプリング」硝子板、亞鉛板等は、以前は外國からの輸入品を用ひてゐたが今は之れも我が國で製出される。

現今國産の趨勢

時計類

併し本邦中の最大工場は、東京である、各種の製品を併せて、價額が六拾萬圓以上に上る事がある、

大阪でも多少の懐中時計を製し、掛け時計と合せて、四萬圓餘はある、其の他地方には單に、時計の側ばかりを造つて、外國製の機械を入れてゐる所も少くはない。

年々五六萬圓の輸出額の中、其大部分は名古屋製品で東京の品は極めて少くないのである。

時計の輸入、金、銀、白金、其他の製品を合せて、價額貳拾六萬圓の輸入がある、機械ばかりを輸入するものも少くない。

輸入品の主なものは、瑞西の「タバン」「シミワ」兩會社製のものが多い、米國製の「ルサム」會社がこれに取いでゐる。

漆器及漆業

利器の由來 漆器は古來我國の特有産物で、遠く海外にも知られ我國を稱して「ジャパン」といふも漆の名より起つたと云ふことだ、漆器を塗物と呼び來れるが漆質の堅固と髹法の堅緻とを本邦漆器の特色として居る、其の起源は遠く孝安天皇の頃既に漆部といふものがあつた、孝徳天皇の時には漆部司を置かれ、諸國の漆器を産する地は論して調に充てしめられた、此の時髹漆の術は各種の方面に利用されて、棺の際會に塗つて其堅耐を期し、又は冠背の羅に塗り、或は器具器物に塗つて金具の腐蝕を拒くなど、其用途は漸く廣くなつた、後天務天皇の朝に赤塗を用ふることを創めた、

奈良朝に至つて其漆塗の技術大に進歩し、或は螺鈿を嵌め或は抹金鏤及び密陀僧を以て繪畫を施し、愈々精巧を極むるに至つた、之が蒔繪の創である、正倉院や法隆寺の御物什寶は當時の精緻なる技術を證するに足るのである、かくて華美を競ふ人々の好みにより蒔繪の術は一層の巧妙を極るに至つた、其後寛平、延喜の頃より宮中大儀の器物にも蒔繪を施すことゝなつた。一條天皇の頃に至つて武具の類より硯箱火桶の如き常の調度に至るまで、蒔繪を施さないものはなく紫檀など唐木にさへ蒔繪螺鈿を施すことが流行した、以上の聖武天皇より安徳天皇に至る間の蒔繪もの及彩漆を施したるものを後世上代物と云ふ、

鎌倉時代にも蒔繪もの行はれた、工人中に物象を彫鑿して

之に彩漆を施せるを製出した、處が當時の嗜好に投じ大に流行した、其後之に倣ひ小田原彫・越前彫・吉野彫など出たが、技巧は鎌倉には及ばなかつた、其後鳥羽天皇より仲恭天皇に至る迄の製作物を後世時代物と稱した、

足利時代に至つて義政華美の風を好み、調度の類悉く蒔繪を施し、天下風を成し其發達も極致に至り、堆朱雄黑を創むるに至つた。東山時代物といふは此頃の漆器を云ふのである。降つて織田豊臣の出る頃より茶器の名巧を索め漆工に製作させた、是より桃山時代には名工輩出して一種云ふべからざる雅致を存するものが多く出た、世に之を天正蒔繪とて賞美する、

徳川時代に至つては世の太平につれて華美の風進み漆器蒔

三二二
繪の技も更に精美を極むるに至つた、此時代の末世海外貿易の開くるに及び西洋器具を髹漆する風漸く行はれ、明治維新と改つても此技益奨励進歩し海外へ輸出して外人の賞讃を博したのである、

漆器の原料 漆器の原料は木地と漆液との二種である、漆汁は漆樹より採つて製したるものであるが、其種類多く、用途によつて適不適があるから上中下に區別することは六ヶ敷いが、最上の漆器に用ふるを蠟色漆といつて粘着が強くなく殆ど透明である、次を花漆といつて上塗に用ふるもの透明と黒色の別がある、最劣等のものをセシメ漆といふ、粘着強く物をつぐに適する、下塗に用ふるものはおもに之で或は生漆を用ふることもある、以上の漆を種々に製し分けて、金銀彩

色など多様に渡る、漆樹は、温帯に産する落葉喬木で、我國では岩代の大沼、羽前の米澤、山形、陸中の南部、越後、上野、信濃、越中、越前、大和等に多く産する、是等漆樹よりは副産物として蠟を採り、又其殘滓にて牛馬を飼養すれば牛馬肥大し、毛色も極めて潤美になるといふ、其木材は寄木細工下駄材などに用ひられて頗る有用のものである、

洋 傘

洋傘類の生産地 現今一般に廣く用ひられてゐる洋傘は安政年間に、我國に傳つて來たものであつて、從來の和傘に比して携帯に便利なものと、晴雨何れにも利用出来るからと次第に邦人に廣く使用されるに至つたのである。我國に於いて

もこれの製造を開始するものが多く起つて来て、現今では其品質及び産額に於いても外國品の輸入を防ぎ得るやうになつて。年々多額の輸出をするやうになつた。これの製産地は東京、大阪、京都、愛知、神戸、神奈川及長崎等の諸府縣を主として、其他にも多少の生産あるけれど確實な統計に徴すべきものがないので記すことの出来ないのは遺憾である。

洋傘に一番主要な洋傘骨の産出額は近來年々參拾萬圓内外を上下してゐるがその主産地は東京、大阪兩市である、其他千葉奈良の二縣にも僅かの産出はある。東京府は東京市に主産して、明治三十八年以來年々百餘萬圓の産出があつたが、近時は稍減退して來た。

原料中絹地は甲斐、足利、京都等の産品を用ひ、綿傘地は

輸入品に依つたものである。現今では東京洋傘製造組合を設けて大に其の改善を計つてゐる。

洋傘骨の中凹形線の製造業は、現今東京大阪であるが(千葉及奈良の少額の産出を見る)目下は頗る進歩の域に達して來た。東京では小石川區の岩崎某、本所に木村某との二工場に主産して各種の溝骨を製してゐる。其の品質も頗る佳良で外國品に比しても遜色がない。大阪府下の洋傘の製造は明治五年日野利三郎といふものが、竹骨金巾張を以つて之を製造したのが始まりで、其後熱心に其製法を研究して稍良好な製品を得た、明治十二年には支那朝鮮地方に多少は輸出するやうになつたのである。爾來種々な變遷を経て漸次同業者を増加することになつて、二十七年には組合を組織して製品の改善に努め、四十一

年更に大阪蝙蝠傘商工組合に改めて今日に至つたのである。
最近製造戸數八〇、職工は三百餘名に達して、製品の大部
分は繻子及び綿張に屬してゐる。

其他洋傘骨及び柄の如きも當市で多く生産せられた。愛知
縣は其起原が詳かでないけれど、現今名古屋市に主産して西
春井郡にも少額を産する。製造戸數四十九、職工四百を算し
産額は四拾九萬六千圓に達してゐる。京都府は京都市に主産
して明治十年頃から始つたものであるが、爾來年々多少の進
歩を示してゐる。而して、其作業は原料の中絹傘地の一部を
本市に産する外、全部大阪其他に仰ぎ流行の趨勢に鑑みて種
々優美な製品を出してゐる。現今製造戸數は七、職工約七十
名であつて、産額貳拾貳萬圓に達してゐる。

洋

傘

傘用綿布
の輸入

洋

傘

市内下京、松原通り東洞院西入今井六兵衛の如きが主な生
産者である。

傘用綿布の輸入、本品は年々英國から其多額を輸入するも
のである。其巾は五種あつて四十四吋のものが最も多い。男
子用には四十四吋以上六巾の綾地であつて絹艶を付したもの
と付せないものがある。又婦人用傘地は「プリント」絹ボルダ
ア「花織出し等があつて、就中絹ボルダア」が最も多く輸入せら
れた。

即ち左表はそれを示したものである。

國名	明治四十四年	同 四十三年	同 四十二年
英吉利	一四二六、二九三圓	一二五、八三三圓	七五、七三〇圓

現今國産の趨勢

獨逸	一二,二五九	六,八二四	四,三〇四
伊太利	三,三〇〇	八,一五五	八五,〇一〇
計	一,四九,七五二	一,三五,八〇二	八五,〇四四

三一八

洋傘製品其他の輸出 本邦製洋傘の輸出は、主に亞細亞東部に於ける諸國であつて、殊に支那を主としてゐる。綿布張が其大部分を占めて絹張の輸出は極めて少ない。大阪市は輸出製品の主産地で其品質は他の生産地よりか稍劣る所がある。けれども其價格の低廉である爲め大に海外の需要を増加するに至つた。

又傘柄及び傘手の如きものは次第にその輸出を増加した。現今では從來の印度、香港等の主要仕向地の外、遠く歐米即ち英、獨、佛、伊、澳、匈、米等の地方にも販出せらるゝに

至つたのである。その中の多くは大阪製であつて、其他は東京横濱等であるが、その統計によつて輸出額を示すと左の通りである。

國名	四十四年	四十三年	四十二年	摘要
清國	九三,六九二	九四,九六八	八六〇,一三九	四十四年全輸出額の減少は
朝鮮	—	一五三,一六八	一五四,三二二	朝鮮の輸出を計上せざるに
香港	八九,六六八	一四,七三三	一四三,六五七	依り其他は多少の増加を示
海峽殖民地	一三一,九六〇	二二〇,九四四	一六九,〇三三	せり
蘭領印度	三四八,四四二	三六,五九〇	二六二,一六四	
其他	—	—	—	
計	一,六五七,四三三	一,八四九,七三三	一,六六二,二七	

現今國産の趨勢

三一九

國名	四十四年	四十三年	四十二年	摘要
香港	八、三四	二八、五七	三〇、二二	四十四年には 歐米各地の需 要、數年に比 し著しく増加 せり
英領印度	二九、五一	一七、二〇	六、九五	
比律賓	二四、七二	二六、三六	一四、二八	
其他	—	—	—	
計	四九、二〇六	三五、六六	三二、八九	

三二〇

國產展覽會概觀

國產獎勵とは第一に我が生産業の獨立を計らねばならぬと云ふ事である。言ひ換へれば我が經濟の獨立を計るとも云ひ得る。而して經濟の獨立とは經濟的鎖國主義を主張するものではない。又國產獎勵の意義も外國輸入品を絶対に排斥せよ

と云ふのではない。只要は我が内地品で外國品と同等に使用し得らるゝ品質のものを使用せよと云ふのに外ならない。而して今日の戰亂が遠からず平定するとしても又何時再び國交が斷絶されるか解らない。斯る時には少くとも國民として直接生活に必要なものだけでも、自國內で供給が出来る様に置いて置かねばならない。即ち國民の生活に内地品で多少の不自由はあつても、差支のないやうにして置くといふことが國產獎勵をする根本的意義に外ならないのである。

今や我が國でも、各製造工業も發達して、歐米のものと同等差異がない許りか、中には歐米品を凌駕したものさへ少ない。けれども未だ凡てに斯くの如きを見る事の出来ないのは事實であるから、當業者は此の好機會を利用して、一層奮

現今國產の趨勢

三二一

三三三
 勵努力して國產獎勵の實をあげん事を望むのである。
 そこで今其第一回國產展覽會としての場内を巡覽すると、
 凡ての點に良い成績をあげてゐるのが眼についた。しかし觀
 覽者には織物類の如く一ヶ所にまとめて、各種を陳列したら
 ば誠に都合が良からうと思ふ。で先づ余は巡覽したものを案
 内的にかいて見やうと思ふ。

化學工業品

金屬天井板 從來は凡て舶來品のみの需要であつたが、今
 や内地製品が可也の成績を以つて實際上に需給される様にな
 つたのである。出品は日本橋本石町の清水商會合資會社等で
 ある。

ガラス紙 凡そ七八年前には未だ我國一般にガラス紙の需
 要さへ知らなかつたが、今や窓ガラスとしての需要が増加し
 て來たので、本品の必要は一般に認められ、可也の輸入を仰
 がねばならなかつたが、今は内地品にも品質に於て何等遜色
 のないものが製出されるに至つたのである。又ステンドガラ
 ス紙の如きは頗る美麗なもので、池田商店の出品がある。

ライト塗料 神田區柳町の山本商會の出品がある。

ライト塗料の輕便なのは先づ古壁塗換等である。而して價
 額の低廉なものと、使用の容易なものとに頗る多くの賞賛を博し
 てゐる。和洋室の何れに用も使し得られるのは便利である。其
 丸の内の東京ステーションなどは全部是を使用してゐる。其
 の他早稲田大學三井銀行帝國劇場等すべて各會社諸官省諸學

ビツチ

ワニス

ペイント

赤燐黄燐

品 業 工 學 化

校などが使用してゐる。余の使用感想を云つて見ると、日本室の壁ではあるが誠に美麗で且つ堅固なるは賞賛に値する。
ビツチ クレオソート、ナフタリン、硫酸アンモニア、重油、軽油等の三井の出品がある。

又日本醋酸製造會社は、アセトン、フォルマリン、輕ター、重ター、氷醋酸等の出品がある。

ワニス ワニスは日本ペイント會社及妻木式ワニス製造所等の出品がある。各種の色も頗る美麗なものである。

ペイント 同じく日本ペイント會社のものは頗る需要も多だけに、品質も優良であることを認めない譯には行かない。
赤燐、黄燐 黄燐赤燐苛性曹達等の出品は工業試験所である。

漆器

品 業 工 學 化

二硫化炭素液硫酸は久原鑛業の出品に係るものである。

漆器 本品は本邦固有の工業品で、我が國の重要輸出品ではあるが、當業者は一層の工夫と努力をしなければ、近時は獨逸と佛蘭西に紙質で製され、そしてラワク様の塗料を塗つて、日本の漆器を壓せんとしてゐる傾きがある。しかも凡て日本風の人物花鳥を描いて、模造漆器が製出せられてゐる。而して其の價も低廉な爲め可也の好評を博してゐるから、我が當業者は、大に注意せねばならない。我産出の年額は壹千萬圓位になつてはゐるが、輸出の過去三年間を平均して見ると、僅に百萬圓許りであるとはなさない次第である。

當業者はくれぐれも奮勵努力せねばならない。陳列中には各種の出品がある。

硝子

石油

葡萄酒

品 料 食 飲

硝子 旭硝子株式會社の圓筒硝子其他の出品がある。本邦の硝子工業は未だ一層の奨励を努めねばならぬ。未だ輸入は頗る多く厚板硝子などは五拾餘萬圓、又薄板硝子の如きは貳百餘萬圓に達してゐる。しかし硝子製品の輸出は年額貳百九拾餘萬圓である。

石油 石油及其副産物の見本は日本石油株式會社及び寶田石油會社の出品がある。

石油の輸入はまだ頗る多額を示してゐるのは、我が斯業が一層努力奮勵せねばならない處である。

飲 食 料 品

葡萄酒 牛久葡萄酒の出品がある。本品は茨城縣稻敷郡牛

麥酒

日本酒

味淋

醬油

品 料 食 飲

久村神谷葡萄園に於て醸造せられるものである。過去三ヶ年平均約五百餘石製出せられてゐる。

又登美葡萄酒の出品がある。本品は甲州登美村の大日本葡萄酒株式會社で醸造せられてゐる。

麥酒 大日本麥酒會社は、ビール原料たる麥芽を最近の新築された目黒の同會社内の麥芽工場で、凡そ四萬石を自給してゐる。其他サクラビール、カプト、キリン等は輸入麥芽を使用してゐる。出品者は大日本麥酒とサクラ麥酒の二會社だけである。

日本酒 日本酒は醸造試験所其他の出品がある。

味淋 味淋は流山の秩元氏等の出品である。

醬油 醬油は目下多少の輸出はあるが、多くは外國に在

現今國産の趨勢

蜂蜜
ラヂウム
鑛泉

カタン糸

ミシン

品 用 常 日

留する本邦人の需要を充すのが主である。

出品者には茂木房五郎氏外斯業の一流者が多い。

蜂蜜 蜂蜜は箱根の隅谷富次郎氏の出品に係るものである。

ラヂウム鑛泉 世界一印の甲州ラヂウム鑛泉で、四谷甲州

ラヂウム商會の出品である。

其他日清製粉、東亞製粉等の諸會社の出品は皆好評を博して
ゐるものである。

日 常 用 品

カタン糸 は帝國製絲株式會社の出品である。品質に於いてその優良であることは、誰にも容易に認められる。

ミシン 各出品中にも比較的に價格が低廉であるものがある。

靴

工コルク細

器振動按摩

手提金庫

靴クリーム

品 用 常 日

るが、其中でも一臺參圓五拾錢位なのもあつた。

靴 柴田製靴店及び松崎製靴店の出品がある。兩店共に價格が比較的安い様だ。

コルク細工 近頃コルク細工の需要が著しく増加した。日本コルク會社のコルク下駄等も日用品として適して行きさうである。

振動按摩器 同器は随分各種があるが、方法は皆同じである。家庭用品には是非一つは置くのもいい。

手提金庫 各種の金庫があつて、可也價格の安いものもある。

靴クリーム 同じく各種の出品があるが、皆な各の特色をもつてゐる。宮下商店、高松商會等の出品がある。

現今國産の趨勢

品 用 常 日

機械製靴 近頃漸く本品の眞價が知れて來た様である。價格の低廉で可也に立派に見える處から、近來其の需要が頗る増加しはといふことだ。當業者は斯業に努力して今後一層發展を示さんことを望んで置きたい。

鶏卵半熟器 民野商店の發賣に係るもので場中に陳列されてゐる。比較的都合のいゝ日用品として、庭にはおくのもいゝ。

懐中時計 近年は輸入時計も可也少くなつたが、未だ百二十四萬の輸入がある。我國にも二三の製造會社が設立された事はあつたが、何時か營業上の様々な困難に會つてその儘中止して了つたものである。而して目下本邦の唯一のものとしてあげて見れば東京銀座の服部時計店の精工舎であらう。

品 用 業 工 作 製

同舎の製品は常に外品を凌駕するまで進歩して輸入時計を防止してゐるといふ事だ。其他附屬品もすべて内地品に據つてゐるとは、誠に喜ぶべき事實と云はねばならない。

掛置時計 今や内地製掛置時計とも、盛に輸出さる様になつてゐる。製品は矢張精工舎のものであるが、主に支那、印度方面へ輸出してゐるのである。而して昨年の輸出高は九拾九餘萬圓に達して、今は裝飾的のもの外は殆んど輸入を仰がない迄に至つたとは心強いことである。

冷蔵庫 帝國冷蔵株式會社の出品に係る家庭用のものには拾九圓位から都合のいゝのがある。

製作工業用品

製 作 工 業 用 品

三三二

鋼管 日本パイプ製造會社の眞鍮鋼管などは輸入品を凌駕する程の成績を示してゐる。又日本鋼管會社の引拔鋼管もその成績の優秀なるを見ない譯には行かない。

鉛管 日本鉛管 東海鉛管等の斯界の代表的會社の出品がある。

調帯 富士調帯、阪東調帯、東京旭ゴム調帯諸會社の出品がある。製作の技術の進歩は著しいものである。

電線 横濱電線、共立電線、藤食電線、古河等の會社の出品があつた。その中で藤食電線のケーブル、ゴム線、被覆線絶縁線等が最も眼立つものである。其他共立電氣の日本式積算電力計などがある。

ラトナ 穴原商會の出品に係るもので、セントモーター或

文 房 具

はセメントコンクリートに混用して水氣の防止が出来るものであるから、定根や壁等に用るのには便利なるものである。其外にも防火ペイントなどの製品がある。

其他品川白煉瓦の出品製品及び日本アスファルト等の諸會社の出品に見るべきものが多い。

純内地製品としてのスワン万年筆の出品がある。其他に丸善インキ、篠崎のチャンピオンインキ及び鉛筆類の出品がある。鉛筆などは内地品の需要も頗る増加して、専門の畫家及び製圖家以外のものなら充分内地品が使用得られるのである。又丸善のインキ等も今や比較的多額の輸出を見るやうになつ

現今國産の趨勢

三三三

たのである。

其他文房具に就いては本著の文房具の中に説明してあるから、今は此處へはかゝぬ事にした。

織物類

織物類には日本毛織、東京製絨、後藤毛織、富士紡績、東京モスリン、東京キャラコ、京都織物、高崎製織等の諸會社の出品は頗る賑かなものである。殊に日本毛織會社ではネル羅紗、毛布等の卸賣をやつてゐる。

大正二年に於いての織物類の輸出入額は絹物が四千萬圓弱で綿織物が參千四百萬圓弱の輸出であつた。更に毛織物となると、壹千貳百五拾萬圓の輸入である。

而して綿織絲はその輸出額が七千萬圓で輸入が壹千萬である。本展覽會には各種の織物のりべてが出品されてある。其他詳しい事は本文の織物類に説明してある。

機械類

機械類の出品は玉屋商店の天文經緯儀、汽車製造會社の鐵道機關車並に客車の模型、神戸川崎造船所の廣軌機關車の模型沖商會の電話機並に原寫機、反應機、齋藤兩人の醫療機械、大阪電機製造株式會社の電動機並に變壓機、等其他石渡電機製造所とが主である。

機械類の輸入總額は大正元年に參千萬圓弱で大正二年には參千七百萬圓弱で、年々増加して來る。しかし一方には内地

製品も逐年進歩して行く。而して近年は其年額が參千萬圓以上の製品を得るに至つたのである。昨年に於ける輸出額は約貳百五十萬圓である。詳しくは同じく本文に機械類にて説明してある。

以上にては未だ充分諸出品に就いて、書けなかつたが又更に機會を得てかく事にして、今回は是で割愛して置くが、各階級の諸士及び教育者並に生徒諸氏も是非行つて見る必要があらうと思ふ。

現 今
國 産 の 趨 勢 終